

A V部

複文(3) 従文のテンスとアスペクト

従文(A9.1)がアスペクト補完名詞を修飾する形での複文のテンスとアスペクトについてはAIV部において論じた。ここでは従文が一般の名詞(非アスペクト補完名詞)を修飾する場合のテンスとアスペクトについて論じる。

A12章では、二重テンスシステム(絶対テンス・相対テンス)の扱い方の基本を説明する。

A13章では、動詞従文の内容を出来事的なものとして把握する場合を扱う。二重テンスのシステムを図記号、記号で表示し、表の形にして全体を把握しやすくする。状態性属性の特殊性にも触れる。

A14章では、動詞従文の内容を質的なものとして把握する場合を扱う。

A15章では、形容詞の場合について考える。

A12章

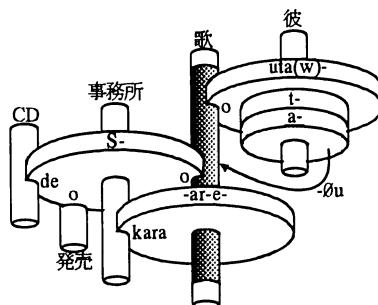
実体修飾の時相的側面

A12.1 自属性による修飾

図A12-1のような構造がある。この構造は「彼 \emptyset_1 歌を歌った」という単位構造と「歌 \emptyset_1 事務所からCDで発売される」という単位構造から成り立っている。この単位構造の複合体からは基本的に

A12-1> 彼が歌った歌は事務所からCDで発売される。

という表層形式が導き出される。ここでは「彼が歌った」という部分が「歌」を修飾し、「彼が歌った→歌」が名詞節となって、これが次の「事務所からCDで発売される」の(受身)主語となる。(矢印→は実体修飾を表す。実体修飾の定義についてはA16.2 参照。)



図A12-1 彼が歌った歌はCDで発売される

このAV部においては、考察の要素を一つ減らすために、修飾を受ける実体(名詞)が、「彼が歌った歌」の「歌」のように、修飾構造(彼が歌を歌つた)の構成要素(歌)となっているような場合の構造を扱う。つまり、実体(歌)が自属性($uta-i=t-\emptyset=a-$)による修飾を受ける構造を扱う。たとえ修飾を

受けていても、その実体が修飾構造の構成要素になっていないような構造（実体が他属性による修飾を受ける構造、A16.2 参照）は、ここでは扱わないことにする。（ただし、扱い方は同じである。ありうる実体修飾の様式についてはA16章参照。）

A12.2 二重テンスシステム

1) 一般名詞の修飾ではル形、タ形の制約がない

AIV部では、複文のテンスとアスペクトの基本的なありさまについて考えた。その際、従文によって修飾される名詞を「まえ・あと・とき」といったアスペクト補完名詞に限定した。アスペクト補完名詞の場合は従文動詞がル形をとるか、タ形をとるかに関して制約がある場合（「ルまえ・タあと」）と、制約がない場合（「ル／タとき」）がある。

このAV部においては、扱う名詞をアスペクト補完名詞以外の一般的な名詞とすることになっている。一般的な名詞の場合は、従文動詞がル形をとるか、タ形をとるかに関してアスペクト補完名詞の場合のような制約がない。たとえば「歌」という名詞は

A12-2> 彼が歌った歌はCDで発売される。

のようにタ形で修飾されてもよいし、

A12-3> 彼が歌う歌はCDで発売される。

のようにル形で修飾されてもよい。

ル形・タ形の選択は現実の事態のあり方と話者のとらえ方に対応している。

なかには、現実の事態に応じるために、常に一定のアスペクトを好んで選択する名詞もある。

A12-4> 練習をした結果02歌がうまくなつた。

A12-5> CDで発売する予定が変更になつた。

中の「結果・予定」のような、ある事態の一定の局面と密接に結びついている名詞では相対テンスがルをとるかタをとるかは名詞そのものが決定している。

2) 絶対テンスと相対テンス

A12-2>の「彼が歌った歌はCDで発売される。」の場合、「歌」を修飾している「彼が歌った」は、①過去の出来事とも考えられるし、②未来の出来事とも、③繰り返される出来事とも考えられる。一方、「発売される」は、④未来の出来事とも考えられるし、⑤繰り返される出来事とも考えられる。①②③と④⑤を組み合わせてみると、次のようになる。

- ①+④ (先月) 彼が歌った歌は、(来週) CDで発売される。
- ②+④ (来週) 彼が歌った歌は、(来年) CDで発売される。
- ③+④ (これまでに) 彼が歌った歌は、(来年) CDで発売される。
- ③+⑤ (今後) 彼が歌った歌は、(いつも) CDで発売される。

この4例すべてに共通している同一の「歌った」という形でも、①+④では彼はもう歌を歌ったことになっているし、②+④ではまだ歌っていないことになる。これは、同じ「歌った」でも、①が絶対テンスをとり、②が相対テンスをとっているために生じている現象である。③は両方がありうる。

また、A12-3>の「彼が歌う歌はCDで発売される。」の場合、「歌」を修飾している「彼が歌う」は、⑥未来の出来事とも、⑦繰り返される出来事とも考えられる。「発売される」は、⑧未来の出来事とも、⑨繰り返される出来事とも考えられる。これを組み合わせてみると、次のようになる。

- ⑥+⑧ (来週) 彼が歌う歌は、(来年) CDで発売される。
- ⑦+⑨ 彼が歌う歌は、(いつも) CDで発売される。
- ⑦+⑨ (今後) 彼が歌う歌は、(いつも) CDで発売される。

すると、次の2つのペアは、従文動詞語の形は「歌った」と「歌う」で異なりはするが、それぞれ同じ事態を表していることになる。

-  ②' +④ (来週) 彼が歌った歌は、(来年) CDで発売される。
-  ⑥' +⑧ (来週) 彼が歌う歌は、(来年) CDで発売される。
-  ③' +⑤ (今後) 彼が歌った歌は、(いつも) CDで発売される。
-  ⑦' +⑨ (今後) 彼が歌う歌は、(いつも) CDで発売される。

このようなことが起こるのは、同じ事態を描くのに、やはり、一方(②')、

③')では相対テンスを用い、他方(⑥', ⑦')では絶対テンスを用いているからである。

3) 二重テンスシステム

以上のように、日本語には、同一の動詞時相形式で過去と未来という異なる領域を示す現象があり、また、異なる動詞時相形式で同一の事態を表す現象がある。これは日本語に絶対テンスと相対テンスの二重テンスシステムが存在することに起因している。このAV部では、この二重テンスシステムの構造について考察する。

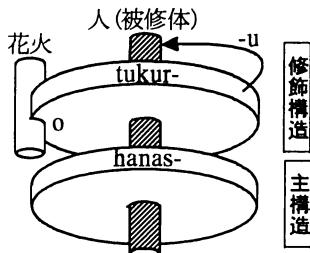
なお、ここで使用している「時相」という語の中の「時」は「テンス」を意味し、「相」は「アスペクト」を意味している。つまり、「時相」とは「テンス・アスペクト」の意味である。

A12.3 修飾構造と主構造

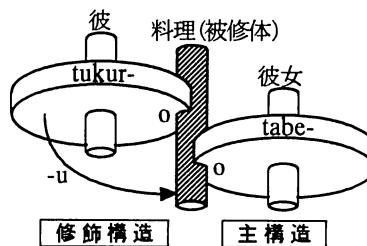
二重テンスシステムについて考察を進めるために、次のような例文を設定する。

A12-6> 花火を作る人が話す。

この文の構造は図A12-2 のようになっている。



図A12-2 花火を作る人が話す



図A12-3 彼が作る料理を彼女が食べる

この構造図は、この文の構造が2つの単位構造が複合したものであることを示している。一方は「修飾構造」であり、もう一方は「主構造」である。修飾される実体(名詞)は「被修体」である。これらの用語は次のように定義

される(A16.3参照)。

被修体………「被修飾実体」の略で「修飾される・された実体」のこと。

斜線を施して図示する。「被修飾実詞」は「被修詞」とする。

修飾構造………修飾属性(被修体を修飾する属性)を持つ単位構造。このAV部においては、被修体を格保持(格関係で保持)している。

被修構造………修飾構造の修飾属性により修飾された被修体が何らかの格に立つ、修飾構造とは別の単位構造。

主構造………修飾構造にならない被修構造。主文として描写される構造。

自属性………被修体が格関係で関わる属性。

他属性………被修体が格関係で関わっていない属性。

図A12-2 の構造では「花火をtukur-」という部分が -u という実体修飾描写詞を伴って実体「人」を修飾している。この単位構造が「修飾構造」である。被修体「人」はこの構造の中にある。この構造とは別に、「花火をtukur-u」で修飾された「人」が hanas- という属性に対して主体として関わっている単位構造がある。これが「被修構造」であり「主構造」である。

図A12-2 では、被修体「人」が修飾構造と主構造の両方において主格に立っている。しかし、これは、被修体が両構造において必ず主格になければならないということを意味するものではない。例えば「彼が作る料理を彼女が食べる」(図A12-3)では被修体「料理」はどちらの単位構造においても共に「を格」に立っている。被修体は修飾構造・主構造の属性に対して何格にあってもよい。

なお、修飾構造の属性を「修飾属性」と呼び、主構造の属性を「主属性」と呼ぶ。図A12-2 の構造では tukur- が修飾属性であり、hanas- が主属性である。

A12.4 修飾属性のとらえ方は3通り、細かく見れば7通り

修飾構造中の実体(名詞・人)を修飾する際に、話者は修飾属性(tukur-)を使用する。そのとき、その属性(tukur-)を次のいずれかのものとして把握する。

[A] 出来事的なものとしての把握

[B] 質的なものとしての把握

さらに[A]には、絶対テンスでの把握と相対テンスでの把握がある（また、どのアスペクトでとらえるかという相違もある）。

つまり、修飾属性には3通りのとらえ方がある。

- 1) 絶対テンスでの把握
- 2) 相対テンスでの把握
- 3) 質的なものとしての把握（ル形、非テンス）

この関係を表で示せば 表A12-1 のようになる。この表では、絶対テンス、相対テンスの内部をさらに分類しており、結果として[1]～[7]のものを区別している。

修飾属性のとらえ方

表A12-1

| 属性把握 | | テンス | | No. | 実体修飾形式 | 例 | |
|------|------|-----|----|-----|--------|----------|-------------|
| A | 出来事的 | 1) | 絶対 | 未来 | [1] | (ティ)ル形 | 花火を作る(人) |
| | | | | 現在 | [2] | (ティ)ル形 | 花火を作っている(人) |
| | | | | 過去 | [3] | (ティ)タ形 | 花火を作った(人) |
| | | 2) | 相対 | 以後 | [4] | (ティ)ル形 | 花火を作る(人) |
| | | | | 同時 | [5] | (ティ)ル形 | 花火を作っている(人) |
| | | | | 以前 | [6] | (ティ)タ形 | 花火を作った(人) |
| B | 質的 | 3) | なし | [7] | ル形 | 花火を作る(人) | |

表中の[A]出来事的属性把握の例文提示ではアスペクトを◎（アスペクト不問の、出来事成立としての把握）を中心に扱っている。

なお、相対テンスをアスペクトを表すものとしてとらえようとする立場があるが、本文法ではその立場はとらない。動詞は相対テンスでありながら、開始・進行中・完了・結果継続等のアスペクトを持つからである。テンスは基準点の位置に関わるものであり、アスペクトは言及点、相対点（A9章、『文法』第17章等）の位置に関わる別のものである。

感覚的に自然な文法か、理性の承認する文法か

「日本語構造伝達文法」は「形態素」のレベルで判断構造をとらえて表層の文現象の諸問題を解明しようとする説明文法である。この文法を理解するためには形態素についての理解が不可欠である。

「形態素」は意味を持つ最小の単位体であり、言語の体系を考えようとするときには基本中の基本の、非常に重要な要素である。ところが日本人の場合、自然な音声感覚の最小単位が a, ki, su, te, no のような「拍」だから、どうしても形態素を認識することが苦手である。

例えば、「学生ダ」というときのダは2つ(正確には3つ)の形態素、d と a からできていて、d は de の格を表し、a は ar- と同じく存在を表している、と説明しても、ふつうはばかげていると受け取られる。拍であるダを分解するなどということ、ましてや单一音素(d や a)が意味を持つなどということは思いもよらないことなのである。

また、形態素を理解していたとしても、nom-i=mas- の -i が2つの属性を結ぶ機能を持つ形態素であることを知らないと、nom-imas- と分析してしまう。形態素は意味・機能を正しく把握する必要がある。

慣れないうちは、「あしたは晴れるだろう」のダロウ(-d=ar-oo)の中にデの格が入っているなどと言われても、とても信じられないかもしない。これは、水が酸素と水素の化合物だ、と言われても感覚的にはとても信じられないのと似ている。

感覚でとらえやすいのは表層文法である国語文法である。しかし、文法学者どうしでさえ感覚は同じではない。感覚を頼りにすることはできない。構造伝達文法では、感覚によってではなく、モノとしての形態素の機能の正しい分析・把握によって研究を進めたいと考えている。

感覚か、理性か。まだ21世紀。感覚に惑わされない勇気がいる。

A13章

従文内容を出来事的に把握する

A13.1 動詞(出来事・質), 形容詞

修飾属性には動詞の場合と形容詞の場合とがある^{*1}。このA13章においては動詞を出来事的に把握する場合を扱い、続くA14章において動詞を質的なものとして把握する場合を扱う。形容詞についてはA15章で扱う。

動詞の表す出来事には、動作性のものと状態性のものがあるが、状態性の出来事の特殊性についてはA13.6で言及する。

この章では、表A12-1 中の[1]より[6]までのそれぞれのとらえ方ができる修飾構造(従文)が、実際にどのような形で現れるのかについて検討する。

また、本章では修飾構造・主構造とともにアスペクトは直接の検討対象となっていないので、アスペクトについては、可能性のあるもののうちから適当なもののみを選択使用するだけとする。(アスペクトは扱う必要がないということではもちろんない。)

A13.2 記号化

1) 要素

まず、動詞を出来事的に把握する場合の、修飾属性と主属性の時間的位置関係のあり方と、これを表現する絶対テンス、相対テンスの関係を記号で簡

*1 「形容動詞」は例えば「元気-de=ar-」「元気-d(e)=a(r)-θu／元気-n(i)=a(r)-θu」「元気-n(i)=ar-aba」であり(『文法』19.2 2)注参照)、実体(名詞)が動詞ar-のデ格・ニ格に立つものなので、一次属性が動詞であるものとして扱い、「形容動詞」として特別に扱うことはしない。しかし、A15.6 9)まとめ②参照。

潔に表示することを考えておきたい。

A12章で設定した例文

A13-1> 花火を作る人が話す。 (=A12-6), 図A12-2)

の構造を中心に考えることにする。修飾構造は「人が花火をtukur-」であり、主構造は「人がhanas-」である。修飾属性は tukur-, 主属性は hanas-である(A12.3参照)。

記号化するためには全体を体系的に把握する必要がある。そのためには、体系を構成する要素を抽出して、それがどのように組み合わされているのかを知らなければならない。

要素として考えられるものは次の3つである。

- ① 修飾属性(tukur-), 主属性(hanas-)の時間的位置関係(先後関係)
- ② 修飾属性(tukur-)の基準時点の位置

……発話時点(絶対テンス)か, 言及点(相対テンス)か

- ③ 修飾属性(tukur-), 主属性(hanas-)のアスペクト

ただし, ③をすべて扱うと, 組み合わせの数が大きくなり, 全体の把握に時間がかかることになるので, ここではとりあえずどのアスペクトを使用するかについては任意的なものとし, 例文において示してあるものにとどめることにする。

つまり, ①' 修飾属性と主属性の時間的位置関係(先後関係)
②' 修飾属性の基準時点の位置(絶対テンスか相対テンスか)
を2つの要素とし, この2要素の組み合わせで考えることにする。(言うまでもないが, 主属性は常に絶対テンスにある。)

2) 具体例

A13-1> 花火を作る人が話す。 (=A12-6)

この文の修飾属性「作る」を「作った」にすると, 次のようになる。

A13-2> 花火を作った人が話す。

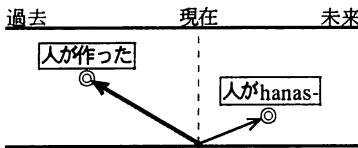
この文の意味するところが A13-3> のようであれば状況は図A13-1のよう

A13章 従文内容を出来事的に把握する

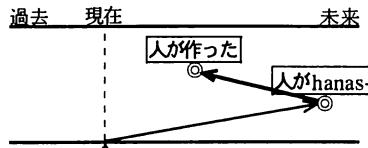
になり、A13-4> のようであれば図A13-2のようになる。（「作った」「話す」のアスペクトは「まるごと（◎）（『文法』17.1）」で扱う。図中の▲が示す点は現在すなわち発話時点である。）

A13-3> (きのう)花火を作った人が(いま)話す。(図A13-1)

A13-4> (あした)花火を作った人が(あさって)話す。(図A13-2)



図A13-1 花火を作った人が話す



図A13-2 花火を作った人が話す

なお、図示において、テンスを示す矢印は、

右上向き(↗)なら「ル」(未来・以後)を表し、

上向き(↑)なら「ル」(現在・同時)を表し、

左上向き(↖)なら「タ」(過去・以前)を表す。

この具体例の場合、前ページの①' ②' について、次のようにになっている。

①”修飾属性、主属性の時間的位置関係(先後関係)について

A13-3>, A13-4>ではともに修飾属性「作る」が先に、主属性「話す」が後に生起している。

②”基準時点の位置(絶対テンスと相対テンス)について

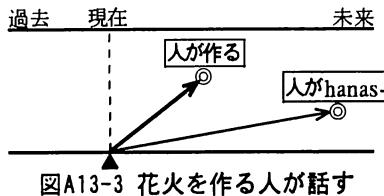
A13-3>では「作った」「話す」の両属性が発話時点を基準時点としており、ともに絶対テンスで扱われている。それで、一方(作った)は過去、一方(話す)は未来となっている。

A13-4>では、修飾属性「作った」は主属性「話す」を基準点としており、相対テンスで扱われ、「以前」を表している。未来にある。「話す」

は絶対テンスをとり、未来を表している。

もし、A13-4>の修飾属性(tukur-)も絶対テンスで扱うこととする場合は、A13-5>のように「作った」を「作る」にしなければ位置関係を保つことはできない。

A13-5> (あした)花火を作る人が(あさって)話す。 (図A13-3)



3) 簡略化、そして図記号化

上に与えられた図A13-1～-3を次のように簡略化することにする。

作った人



話す

図A13-4 (←図A13-1)

作った人



話す

図A13-5 (←図A13-2)

作る人



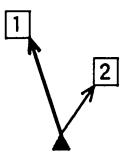
話す

図A13-6 (←図A13-3)

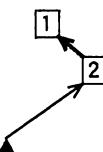
太線で示される矢印は主属性(言及点)ないし発話時点(▲)から修飾属性(従文動詞)に向かう。(主属性から修飾属性に向かえば相対テンスを表し、発話時点(▲)から修飾属性に向かえば絶対テンスを表す。)

細線で示される矢印は、発話時点(▲)から主属性(主文動詞)に向かう。(つまり、細線矢印は常に絶対テンスを表す。)

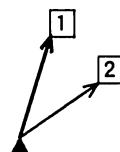
以上をさらに次のように図記号化することにする。修飾属性を [1] で表示し、主属性を [2] で表示する。実際時間上の相対的長さを考慮すると [1] や [2] のようにしなければならないところではあるけれども、図記号としては、通常は [1], [2] のような短い形を用いる。この形ではアスペクトの、つまり言及点・相対点の位置までは明示しなくともよいこととする。（[1] や [2] の形を用いる場合には明示できる。）



図A13-7 (←図A13-4)



図A13-8 (←図A13-5)



図A13-9 (←図A13-6)

4) 記号化(1)

図記号をさらに簡単に次のように記号化する。

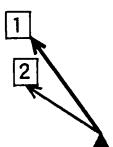
図A13-7 は「絶対1〇2」あるいは「絶1〇2」のように記号化する。「絶対・絶」は修飾属性が絶対テンスで扱われていることを示している。「〇」は発話時点の位置(つまり現在点)を示している。「1」は修飾属性を示し、これが〇よりも前(左)にあるので、修飾属性が過去にあることが表されている。同様に「2」は主属性を示し、これが〇よりも後(右)にあるので、主属性が未来にあることが表されている。「絶対1〇2」の読み方は「絶対テンス、修飾・過去、主・未来」である。

図A13-8 は「相対〇12」あるいは「相〇12」のように記号化する。これは修飾属性が相対テンスで扱われ、修飾属性、主属性がともに〇の後(右)、すなわち未来にあることを意味している。「相対〇12」の読み方は「相対テンス、修飾・主とともに未来」である。

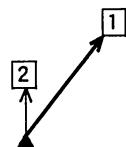
図A13-9 は「絶対〇12」、「絶〇12」のように記号化する(読み方省略)。

5) 記号化(2)

ここでさらに次の図記号のような場合の記号化についても触れておきたい。



図A13-10 絶⑪○



図A13-11 絶②1



図A13-12 相⑪



図A13-13 相○③

図A13-10では、

- 修飾属性が先ではあるが修飾属性と主属性は同時の部分がある。
- 同時であるものを○の中に入れることにする。
- 同時ではあるが開始に先後関係がある場合は⑪, ②のように○の中に数字を生起の順に並べることにする。終了の先後関係はさしあたり考慮しない。
- この場合、修飾属性、主属性はともに過去なので、現在点を示す別の○の前(左)に出して、⑪○ のようにする。
- 修飾属性は基準点が発話時点なので絶対テンスである。それで、「絶⑪○」と示す。読み方は「絶対テンス、修飾・主、同時・過去」である。

図A13-11 では、

- 主属性が現在にある。現在にあるものは現在を示す○印の中に入れることにし、②のようにする。
- 修飾属性は未来にあるので、②の後(右)に置いて ②1 のようにする。
- 修飾属性は絶対テンスなので、「絶②1」となる。読み方は「絶対テンス、主・現在、修飾・未来」である。

図A13-12 では、

- 主属性が先行の同時である。それで、⑪で表す。
- 両者とも現在点にあるので、⑪の○は現在を表す別の○と重なっている。したがって、新たな○を用いる必要はない。
- 修飾属性は主属性を基準点としていて相対テンスである。そこで記号は「相⑪」となる。読み方は「相対テンス、主・修飾、同時・現在」である。

図A13-13 では、

- ・未来において、修飾属性と主属性が先後の別なく、まったく同時に生起する。まったく同時であることを $1 + 2 = 3$ の③で表す。
- ・これが未来なので○③となる。
- ・修飾属性は相対テnsにるので、記号は「相○③」となる。読み方は「相対テns、修飾、主、完全同時・未来」である。

6) 記号化(3) ありうるすべての場合

このように記号化することによって、ありうる基本的なすべての場合がとらえられるようになる。(ただし、アスペクトを考慮していない。)

まず、従文の出来事①と、主文の出来事②のどちらかが先に生起する場合と、同時に生起する場合とで3通りに分類でき、さらに、現在点○を中心にして出来事がどの位置にあるかで8通りに分類できる。また、そのいずれの場合においても絶対テnsでとらえるか、相対テnsでとらえるかで2通りに分類できる。次のとおりである。

6-1) 従文の出来事が先に生起する場合

a 絶対テnsでとらえる場合

絶⑩○／絶12○／絶1②／絶⑩／絶1○2／絶①2／絶○12／絶○⑩

b 相対テnsでとらえる場合

相⑩○／相12○／相1②／相⑩／相1○2／相①2／相○12／相○⑩

6-2) 従文と主文の出来事がまったく同時に生起する場合

c 絶対テnsでとらえる場合……絶③○／絶③／絶○③

d 相対テnsでとらえる場合……相③○／相③／相○③

6-3) 主文の出来事が先に生起する場合

e 絶対テnsでとらえる場合

絶⑩○／絶21○／絶2①／絶⑩／絶2○1／絶②1／絶○21／絶○⑩

f 相対テnsでとらえる場合

相⑩○／相21○／相2①／相⑩／相2○1／相②1／相○21／相○⑩

以上のように、38通り($8 \times 2 + 3 \times 2 + 8 \times 2 = 38$)の場合が考えられることになる。実際はアスペクトを取り込んでさらに細かく見なければならない場合もあるが、その場合はこの分類の中のどれかの変種として扱うことで対応できるものと思われる(例えば A13-20)～(A13-22)。

このようにして求められたすべての場合を、図記号とともに一覧表の形で表せば、表A13-1のようになる。

表中、太線枠内にあるものは同一の事態を絶対テンスで表現しているか、相対テンスで表現しているか、区別できるものである。このことについて次節で述べたい。

なお、実際は、これらありうるすべての時相関係表現が均等に使用されるわけではない。頻繁に使用されるもの、まれにしか使用されないもの等の区別がある。特に日本語教育の教室では教えられる部分が選択され、扱われない部分も少なくない。(誤りとして処理される場合もある。)

A13.3 同一の事態を異なるテンスで表現する

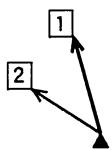
1) 絶対・相対の区別がつく場合

「電車に乗るまえに切符を買った」という事実がある。この事実を表現する際に、修飾属性「乗る」に絶対テンスを適用するか相対テンスを適用するかの選択肢がある。

絶対テンスを適用すれば、

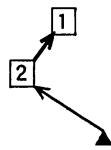
A13-6) 電車に乗った人の1は(乗るまえに)切符を買った。(図A13-14)
のようになり、相対テンスを適用すれば次のようになる。

A13-7) 電車に乗る人の1は(乗るまえに)切符を買った。 (図A13-15)



図A13-14 絶21○

電車に乗った人の1は切符を買った

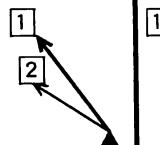
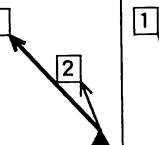
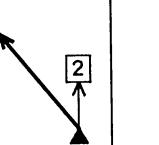
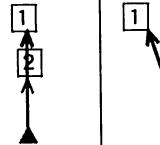
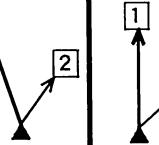
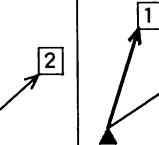
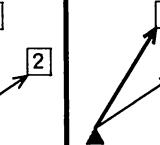
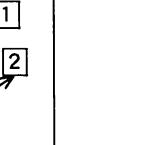
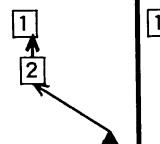
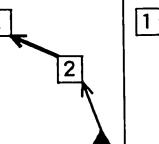
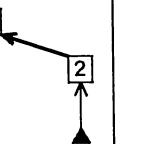
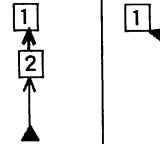
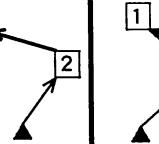
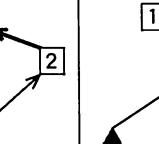
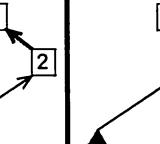
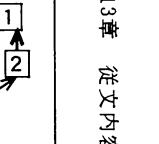
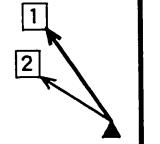
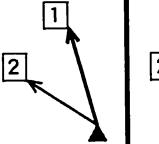
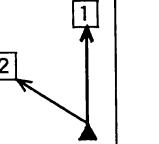
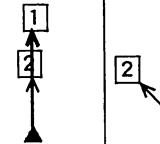
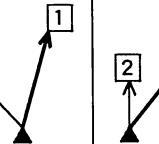
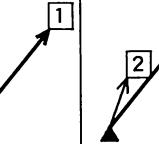
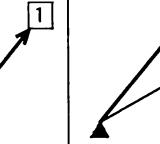
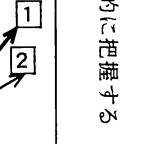
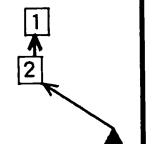
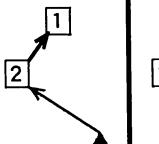
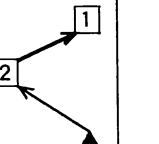
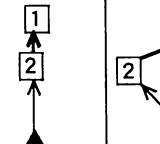
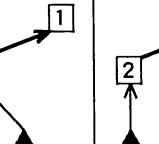
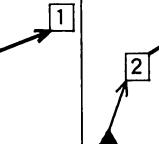
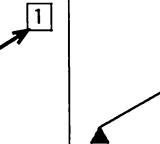
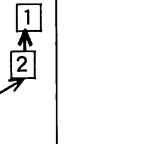


図A13-15 相21○

電車に乗る人の1は切符を買った

修飾属性1と主属性2の時間的位置とテンスの関係

表A13-1

| | | A | B | C | D | E | F | G | H | |
|-----------|-----------|-----|---|---|---|---|--|---|---|---|
| 絶対 テンス | 1が先に生起 | a |  |  |  |  |  |  |  |  |
| | 相対 テンス | b |  |  |  |  |  |  |  |  |
| 同時 c d | | | | | | | | | | |
| 絶対 テンス | (1)○ | 12○ | 12○ | 1② | ②○ | 1○2 | ①2 | ○12 | ○12 | |
| | (3)○ | | | | (3) | | | (3) | | |
| 相対 テンス | (2)○ | 21○ | 2(1) | (2)1 | 2○1 | ②1 | ○21 | ○2(1) | | |
| | | | | | | | | | | |
| 絶対 テンス | 2が先に生起 | e |  |  |  |  |  |  |  |  |
| | 相対 テンス | f |  |  |  |  |  |  |  |  |

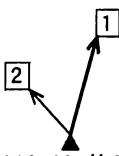
このように、修飾属性と主属性の両方が過去にあって、修飾属性が後に生起する場合は、修飾属性にどちらのテンスを適用するかで、ル・タの使用が異なる。同一事態ではあっても適用するテンスが異なると表現が異なる場合があるわけで、このことは基本的に表A13-1 中の太枠内の場合に起こる。

2) 絶対・相対の区別がつかない場合

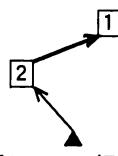
一方、同一事態に異なるテンスを適用しても、ル・タの使用は変化しないということもある。次例のように、修飾属性が未来にあり、主属性が過去にあるような場合などである。

A13-8> 富士山に登る人が来た。 (図A13-16) (絶対テンス)

A13-9> 富士山に登る人が來た。 (図A13-17) (相対テンス)



図A13-16 絶2○1
富士山に登る人が來た



図A13-17 相2○1
富士山に登る人が來た

修飾属性に絶対テンスを適用しても相対テンスを適用しても、ともにルで同じなので、その動詞語の形を見ただけでは、それが絶対テンスなのか相対テンスなのか区別できない。

ただし、

A13-10> その3日後(つまり明日)に富士山に登る人が來た。

のような、主属性(來た)生起時を起点とすることが暗示されているような場合は相対テンスであることが推測できる。

しかし、もし、

A13-11> (今日から) 3日後に富士山に登る人が來た。

のように、現在を起点とすることになると、この修飾属性は絶対テンスで表現されていることになる。

表A13-1 中の太枠で囲まれていないものの場合は絶対テンスなのか相対テ

ンスなのか区別がつかない。そのような場合はどう考えればよいのだろう。すべて絶対テンスで表現されているものと考えれば、相対テンスの欄は無意味ということになる。逆のことも言える。あるいは、やはり絶対テンスと相対テンスの両方があると考えてよいのかもしれない。

次節では表の各部分について簡単に検討する。

A13.4 表の各部分の検討

表の各部分を特定しやすくするために、表の横方向に A～H の記号をつけ、縦方向に a～f の記号をつける。同時の c, d は、c が絶対テンスを、d が相対テンスを表す。

ここでは A から順に検討していく。

[A] ① ②ともに過去、同時

- [A a 絶] 花火を作っていた人が話していた。(作り始めてから)
- [A b 相] (同時に)花火を作っている人が話していた。(作り始めてから)
- [A c 絶] 花火を作っていた人が話していた。(まったく同時に)
- [A d 相] (同時に)花火を作っている人が話していた。(まったく同時に)
- [A e 絶] 花火を作っていた人が話していた。(作るまえから)
- [A f 相] (同時に)花火を作っている人が話していた。(作るまえから)

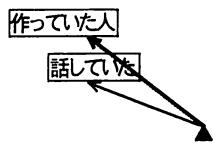


図 A a 絶

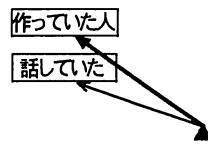


図 A c 絶

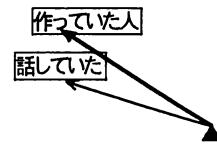


図 A e 絶

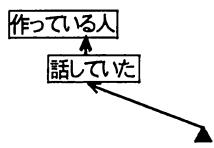


図 A b 相

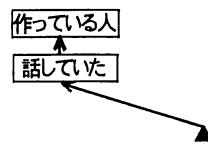


図 A d 相

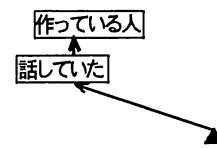


図 A f 相

[A a 絶]と[A b 相]が、[A c 絶]と[A d 相]、[A e 絶]と[A f 相]がそれぞれ同一の出来事を扱っている。いずれも絶対テンスでの表現は「タ」であり、相対テンスでの表現は「ル」であるので、両者の区別はつく。

もし、同時ということを、先後関係を考慮しなくてよいものとするなら、[A]は[A c 絶]と[A d 相]の2つに代表させることができる。

同時の場合は、動作性である修飾属性は進行中のアスペクト「ティ形」をとる。状態性の修飾属性（「ある・いる」等）は属性そのものが進行中のアスペクトにおいて存在するので、わざわざティ形にすることはしない。

状態性の修飾属性は、出来事としてとらえる場合、特殊性を示す。（動作性属性の進行中のアスペクトの場合も同様である。）これについてはA13.6に述べる。

上では動作性の「花火を作る」で例示している。状態性の場合は「花火を作って」の代わりに「そこに」を置けばよい。

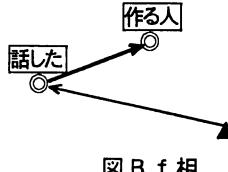
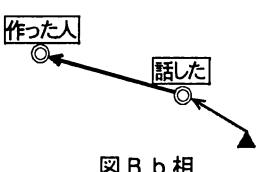
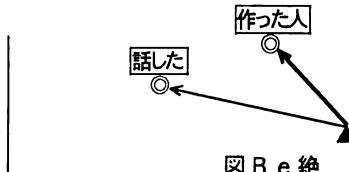
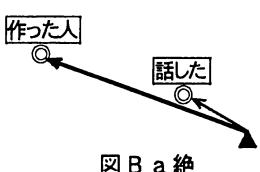
[B] ① ②ともに過去、先後あり

[B a 絶] おととい花火を作った人がきのう話した。

[B b 相] 前日花火を作った人がきのう話した。

[B e 絶] きのう花火を作った人がおととい話した。

[B f 相] 翌日花火を作る人がおととい話した。



ここでは修飾属性、主属性のいずれもが過去にある。

[B a 絶]と[B b 相]は同一の出来事を扱っている。修飾属性、主属性の順に生起している。この場合、絶対テンス、相対テンスはともに「タ」になり、両テンスの区別がつかない。

[B e 絶]と[B f 相]は同一の事象を扱っている。修飾属性、主属性は逆順に生起している。この場合、絶対テンスは「タ」になり、相対テンスは「ル」になるので、両テンスは区別できる。

上の例示は動作性の修飾属性で行っている。状態性の場合は「花火を作つ」「花火を作」を外して「そこにい」を代入すればよい。[C]以下でも同様にすればよい(このことは以後言及しない)。

[C] 一方が過去、他方が現在

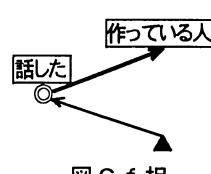
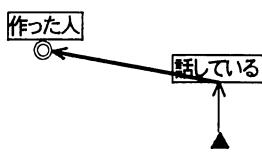
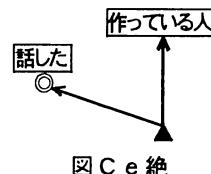
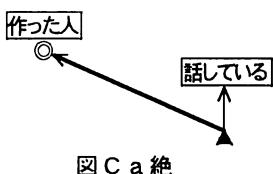
修飾属性ないし主属性のいずれかが過去にあり、他方が現在にある場合である。

[C a 絶] きのう花火を作った人がいま話している。

[C b 相] 前日花火を作った人がいま話している。

[C e 絶] いま花火を作っている人がきのう話した。

[C f 相] 翌日花火を作っている人がきのう話した。(いま作っている)



[C a 絶]と[C b 相]は同一の事象を扱っている。修飾属性が過去にあり、

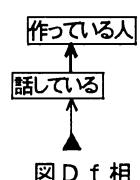
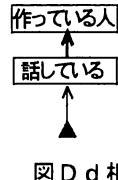
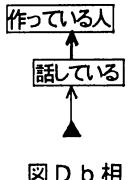
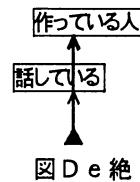
主属性が現在にある。この場合、絶対テンス、相対テンスはともに「タ」になり、両テンスの区別がつかない。

[C e 絶]と[C f 相]は同一の事象を扱っている。修飾属性は現在にあり、主属性が過去にある。この場合、絶対テンス、相対テンスはともに「ル」になり、やはり両テンスは区別できない。

[D] ① ②ともに現在、同時

修飾属性、主属性がともに現在にあり、同時に生起する場合である。

- [D a 絶] いま花火を作っている人がいま話している。(作り始めてから)
- [D b 相] 花火を作っている人がいま話している。(作り始めてから)
- [D c 絶] いま花火を作っている人がいま話している。(まったく同時に)
- [D d 相] 花火を作っている人がいま話している。(まったく同時に)
- [D e 絶] いま花火を作っている人がいま話している。(作るまえから)
- [D f 相] 花火を作っている人がいま話している。(作るまえから)



[D a 絶]と[D b 相]とが、また[D c 絶]と[D d 相]とが、[D e 絶]と[D f 相]とがそれぞれ同一の出来事を扱っている。いずれも絶対テンス、相対テンスでの表現は「ル」になるので、両者の区別はつかない。

もし、同時ということを、先後関係を考慮しなくてよいものとするなら、[D]は[D c 絶]と[D d 相]の2つに代表させることができる。

[E] 一方が過去、他方が未来

[E a 絶] きのう花火を作っていた人があす話す。

[E b 相] 花火を作った人が中1日おいて(あす)話す。

[E e 絶] あす花火を作る人がきのう話していた。

[E f 相] 中1日おいて花火を作る人がきのう話していた。

作っていた人

話す

図 E a 絶

作る人

話していた

図 E e 絶

作った人

話す

図 E b 相

作る人

話していた

図 E f 相

[E a 絶]と[E b 相]が、[E e 絶]と[E f 相]がそれぞれ同一の出来事を扱っている。前者では修飾属性が過去で、主属性が未来である。後者はその逆である。絶対テンス、相対テンスのいずれもが、前者では「タ」になり、後者では「ル」になって、両テンスの区別はつかない。

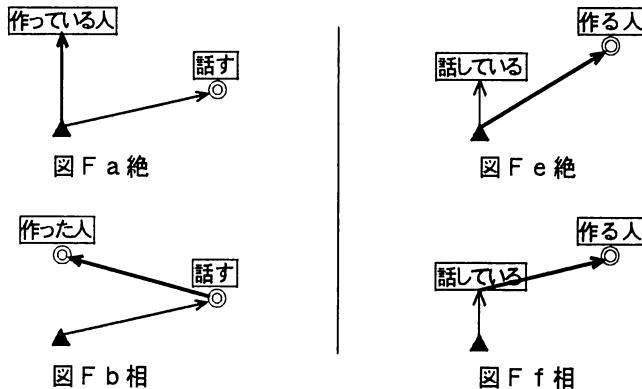
[F] 一方が現在、他方が未来

[F a 絶]と[F b 相]が同一の出来事を扱っている。修飾属性が現在で、主属性が未来である。この場合、絶対テンスが「ル」を、相対テンスが「タ」をとるので、両テンスの区別はつく。

[F e 絶]と[F f 相]が同一の出来事を扱っている。修飾属性が未来で、主属性が現在である。この場合、絶対テンス、相対テンスのいずれもが「ル」になり、両テンスの区別はつかない。

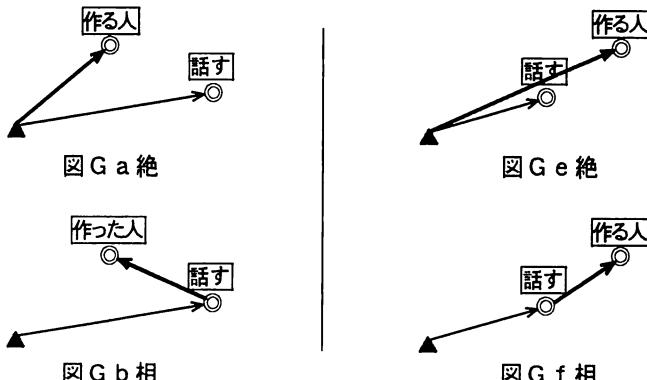
A V 部 複文(3) 従文のテンスとアスペクト

- [F a 絶] いま花火を作っている人があさって話す。
- [F b 相] こうして花火を作った人が中1日おいて(あさって)話す。
- [F e 絶] あす花火を作る人がいま話している。
- [F f 相] 翌日花火を作る人がいま話している。



[G] ① ②ともに未来、先後あり

- [G a 絶] あした花火を作る人があさって話す。
- [G b 相] あした花火を作った人があさって話す。
- [G e 絶] あさって花火を作る人があした話す。
- [G f 相] 翌日花火を作る人があした話す。



ここでは修飾属性、主属性のいずれもが未来にある。

[G a 絶]と[G b 相]が同一の出来事を扱っている。修飾属性が先に、主属性が後に生起する。この場合、絶対テンスが「ル」を、相対テンスが「タ」をとるので、両テンスの区別がつく。

[G e 絶]と[G f 相]が同一の出来事を扱っている。主属性が先に、修飾属性が後に、つまり逆順に生起する。この場合、絶対テンス、相対テンスのいずれもが「ル」になり、両テンスの区別はつかない。

[H] ① ②ともに未来、同時

[H a 絶] 花火を作っている人が話している。(作り始めてから)

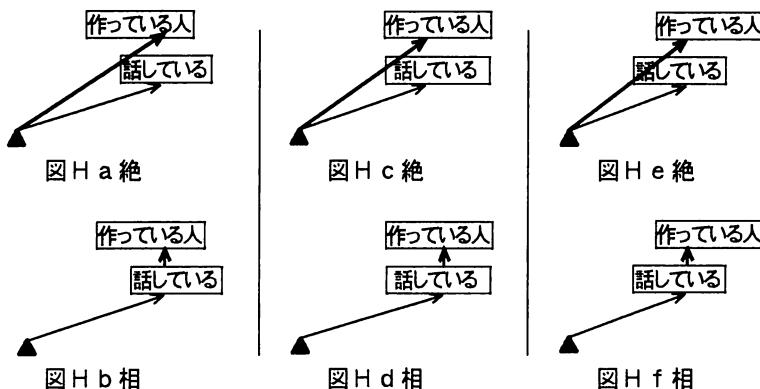
[H b 相] (同時に)花火を作っている人が話している。(作り始めてから)

[H c 絶] 花火を作っている人が話している。(まったく同時に)

[H d 相] (同時に)花火を作っている人が話している。(まったく同時に)

[H e 絶] 花火を作っている人が話している。(作るまえから)

[H f 相] (同時に)花火を作っている人が話している。(作るまえから)



[H a 絶]と[H b 相]とが、また[H c 絶]と[H d 相]とが、[H e 絶]と[H f 相]とがそれぞれ同一の出来事を扱っている。いずれも絶対テンス、相対テンスでの表現は「ル」になるので、両テンスの区別はつかない。

もし、同時ということを、先後関係を考慮しなくてよいものとするなら、

[H]は[H c 絶]と[H d 相]の2つに代表させることができる。

A13.5 絶対テンスと相対テンスが区別できる場合のルとタ

以上、修飾属性と主属性の出来事間のありうるであろう基本的なすべての場合について検討を行った。ここから、従文に絶対テンスを適用するか相対テンスを適用するかの違いが、形の上で明瞭に区別がつけられる場合がどんな場合であるかを言うことができる。表A13-2 のようになる。なお、ここでは修飾属性を従文といい、主属性を主文といっている。

絶対テンスと相対テンスの違いが明瞭である場合

表A13-2

| | 絶対テンス | 相対テンス |
|---------------------------|---------|---------|
| [A] 従文と主文のいずれもが過去で同時に生起する | (テイ)タータ | (テイ)ルータ |
| [B] 従文と主文のいずれもが過去で主文が先に生起 | タータ | ルータ |
| [F] 従文が現在、主文が未来 | (テイ)ルール | (テイ)タール |
| [G] 従文と主文のいずれもが未来で従文が先に生起 | ルール | タール |

さらに、ルとタの関係を検討しやすくするために、表A13-1の各欄をルとタに置き直して新たな表を作成した。表A13-3である。

上の表A13-2 だけを見ると

ルール、タータの場合の従文は絶対テンスをとり、

ルータ、タールの場合の従文は相対テンスをとる

と言えそう^{*1}だが、それは、この絶対テンスと相対テンスの区別が明瞭である範囲に限ってのことなのであって、表A13-3 全体を見渡してみればそう言

*1 三原健一(1992)がこのような説を提唱し、「視点の原理」と名付けた。しかし、後述するように、それは従文使用のすべてをとらえるものではなかった。

修飾属性¹と主属性²の時間的位置とテンスの関係(ルとタ)

表A13-3

| | A | B | C | D | E | F | G | H |
|----------------------------|-----------|-----|---------|-----------------|-----|---------|-----|---------|
| ① が 先 に 生 起 | a (テイ)タ-タ | タ-タ | タ-(テイ)ル | (テイ)ル -(テイ)ル | タ-ル | (テイ)ル-ル | ル-ル | (テイ)ル-ル |
| | b (テイ)ル-タ | タ-タ | タ-(テイ)ル | (テイ)ル -(テイ)ル | タ-ル | (テイ)タ-ル | タ-ル | (テイ)ル-ル |
| 同時 c d | ⑫○ | 12○ | 1② | ⑫ | 1○2 | ①2 | ○12 | ○⑫ |
| | ③○ | | | ③ | | | | ○③ |
| ② が 先 に 生 起 | ②○ | 21○ | 2① | ②① | 2○1 | ②1 | ○21 | ○②① |
| | e (テイ)タ-タ | タ-タ | (テイ)ル-タ | (テイ)ル -(テイ)ル | ル-タ | ル-(テイ)ル | ル-ル | (テイ)ル-ル |
| 相 対 テ ン ス | f (テイ)ル-タ | ル-タ | (テイ)ル-タ | (テイ)ル -(テイ)ル | ル-タ | ル-(テイ)ル | ル-ル | (テイ)ル-ル |

* (テイ)が記入されているのは頻度が高いと思われるもの。記入がなくても使用する可能性はある。

い切ることはできないことが分かる。次のようなルータ， タールの場合には、 従文は明らかに絶対テンスをとっているからである。

A13-12> (ルータ) あした花火を作る人がきのう話した。(E e)

A13-13> (タール) きのう花火を作った人があした話す。(E a)

また、 次の場合には、 ルール、 タータでも相対テンスをとっていると考えられる。

A13-14> (ルール) 翌日花火を作る人があした話す。(G f)

A13-15> (タータ) 前日花火を作った人がきのう話した。(B b)

A13.6 状態性の出来事の特殊性

1) 状態性の出来事

動詞の状態性の出来事とは「存在単位出来事(いる、 ある)」および動作性動詞の進行中「～ている」形、 結果<状態・記憶>「～ている」形で表される出来事(『文法』16.4のこと)である。能力を表す「できる、 読める」や「思う、 適する」等の一部(『文法』13.1)も、 ほかに「～である」形(『文法』18.3)、 断定基(名詞述語文)「～である」(『文法』第11章)も状態性の出来事に含まれる。いわゆる形容動詞文もこれに含まれる。

ただし、「輸入品である」「壮大である」等、 出来事としてよりは質としてとらえるのが基本である場合には A15章 の形容詞に準じた扱いになることがある(A15.6 9)節のまとめ 参照)。

進行中「～ている」についてはすでに前節までに現れている。ここでは、 次の 2) において「ある」について考える。「ある」は「いる」と似ているが、 主体は基本的に非情物であり、「いる」に比して継続時間が長い傾向がある。「いる」は主体が基本的に有情物である(『文法』第18章)だけに、 同じ状態性の動詞であるとはいえ、「ある」よりは出来事性が高いといえる。

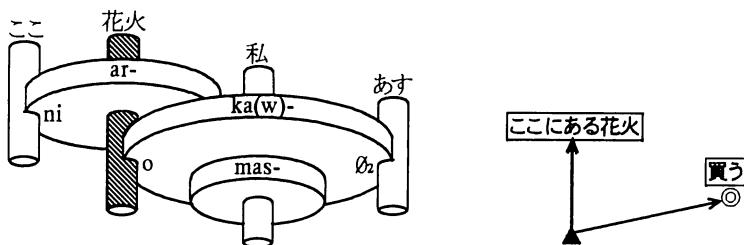
「ある」「いる」を始め、 状態性の出来事を表す動詞はすでに状態性があるので、 現在という時にあっても「～である」の形式にする必要はない(『文法』13.1)。

2) 相対テンス適用時は別の時相関係になることがある

たとえば、次の文について考えたい。

A13-16> ここにある花火はあす私が買います。

構造は図A13-18 のようであり、時相関係は 図A13-19のようになっている。従文の出来事は「花火がここにある」ことであり、現在の出来事である。主文「私が花火を買う」は未来の出来事である。[F a 絶]の関係にある。



図A13-18 ここにある花火はあす私が買います 図A13-19

[F a 絶]の関係にある。ということは、これを相対テンス[F b 相]にすることもできそうである。

A13-17> ここにあった花火はあす私が買います。[F b 相] (図A13-20)



ここにあった花火はあす私が買います 図A13-20

すると、あす花火を買うときは、花火はここにないニュアンスが強くなる。この花火を今すぐどこか別の場所に持っていくのであれば、あるいは話者がそれを予測しているのであればこの文は適切である。しかし、もし花火があすも同じようにここにあるのであれば、この表現は不可能ということではないが、避けられそうである。

従文が状態性の出来事である場合は、その出来事の継続時間の長さに、また、その出来事と主文の出来事との同時性に注意しなければならない。

この例の表す状況の時相関係は、上の 図A13-19 のようになっている場合ばかりでなく、図A13-21 のようになっている場合がある。「花火がここにある」ことは「私があす買う」まで継続する可能性が高い。ということは、つまり、絶対テンスで描写する場合は確かに[F a 絶] (図A13-21) でよいのであるが、相対テンスで描写しようとする場合には、基準点は主文の出来事「買う」になるので、時相関係が変化し、[H b 相] (図A13-22)としたほうが自然になる。

A13-18> ここにある花火はあす私が買います。[H b 相] (図A13-22)

それで、[F]の形での相対テンス描写(A13-17>)はしにくいけである。

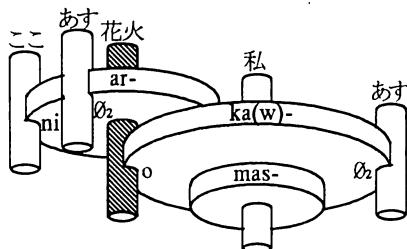
ここにできる文は絶対テンス描写文 A13-16> と同じになってしまふ。



図A13-21 ここにある花火はあす私が買います 図A13-22



ところで、相対テンスで表現される 図A13-22 では時相関係が変化していく、「ここにある花火」というのはあすの時点でここにある花火なので、図A13-23 のように構造図に若干の変更を加えたほうが正確になる(属性ar-の客体として「あす」を加える。加える以前は「いま」がそこにあるものと了解されていた)。

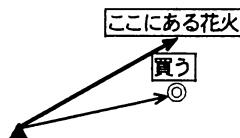


図A13-23 あすここにある花火は私が買います

こうなると、もちろん、図A13-24 のように[H a 絶]の形の絶対テンスで

の描写も可能になる。

A13-19> あす、ここにある花火は私が買います。[H a 絶] (図A13-24)
 今ここにある花火とあすここにある花火と同じものである場合は 図A13-24 のとおりでよいのであるが、もし異なる花火である場合には、表現は同じでも時相図は図A13-25 のようになる。



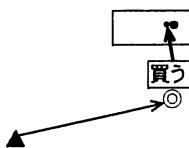
図A13-24 あすここにある花火は私が買います 図A13-25

現実はさまざまである。一つひとつの状況に応じたモデルが描けるが、表層では同じ表現になってしまふことが多い。言語の経済性である。

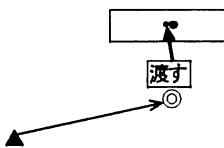
3) 区切りのタ[22'/!]が使用されることがある

たとえば、

A13-20> あす、ここにあった花火は私が買います。 (図A13-26)
 のように「あった」という形が使われることがあるが、これはもちろん過去ではない。一つの解釈として考えられるのは、相対テンスにおいて、[22'/!] (A4章参照) のアスペクト、つまり区切りのアスペクト(認識転換)が選択されたということである。このアスペクトは従文が状態性の出来事を表す場合に使用される。[H b 相]に準じたものであるので、[H b' 相]と表示できる。このときタールの関係になるので、絶対テンス(ルール)と区別できることになる(表A13-1、表A13-3 には反映していないが)。



図A13-26 ここにあった花火を買う



図A13-27 黄色い本を読んでいた人に渡す

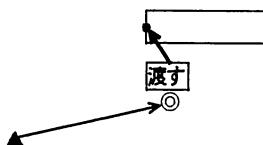
このことは次例のような「～ていた」でも同じである。

A V 部 複文(3) 従文のテンスとアスペクト

A13-21> これを黄色い本を読んでいた人に渡してください。(図A13-27)
この文は、たとえば、閲覧室に行って、黄色い本を読んでいる人を見つけて、
その人にこれを渡してくれるよう依頼している文である。

なお、ちなみに、動作性の出来事である場合には、開始のタ[77]が使用さ
れることもある。

A13-22> この地図は、車を運転した人に渡します。(図A13-28)
未来において、車の運転を担当する人が決まり、その人が運転を始めた時点
でこの地図を渡すわけである。(H b')



図A13-28 車を運転した人に渡す (動作性)

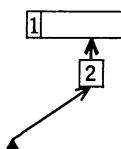
4) 今後の課題

本章では修飾属性・主属性のアスペクトについては任意的なものとして扱
ったが、次の段階としてこれを体系的に扱って記述する必要がある(A13.2
1))。その際、図記号・記号の拡張もすることになるだろう。例えば、

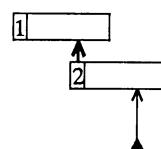
A13-23> 駅前で赤いシャツを着ている人に会う。

の「着ている」は結果状態継続のアスペクトにあるので、図記号は図A13-29
のようになる。また、A13-24>中の「会っている」を結果状況継続のアスペ
クトとするなら、時相図は図A13-30 のようになる。

A13-24> 彼女はおととい駅前で赤いシャツを着た人に会っている。



図A13-29



図A13-30

5) 練習問題風に

それでは、以上の議論をふまえて、練習問題を解く形で考えてみたい。

問題 1

A13-25> そこにいた人はここにいます。

- ① この文では、修飾属性「いた」、主属性「います」とともに状態性の出来事である。このような場合、時相的に何とおりの解釈の可能性があるだろうか。
② また、どの解釈の場合に出来事の状況を同一に保ちながら「いた」を「いる」に換えることができるだろうか。

* * * * * * * * * * * *

- ① 修飾属性[1]がタであるから、太線矢印は左上をさす。主属性[2]がルであり、状態性であるから細線矢印は真上か右上をさす。表A13-1によれば、そのようなものは次の6とおりの場合に当てはまる。

| | | |
|-------|-----------------|---------------------|
| [C a] | (おととい) そこにいた人は | (いま) ここにいます。 |
| [C b] | (2日まえに) そこにいた人は | (いま) ここにいます。 |
| [E a] | (きのう) そこにいた人は | (あす) ここにいます。 |
| [E b] | そこにいた人は | (中1日おいて、あす) ここにいます。 |
| [F b] | (いま) そこにいた人は | (あす) ここにいます。 |
| [G b] | (あす) そこにいた人は | (あさって) ここにいます。 |

- ② さらに、[1]のタをルに換えられるということは、時間的位置関係を保ちながら左上向きの矢印を真上向き、あるいは右上向きに換えられるということであるから、やはり表A13-1により、上の6とおりの場合の最後の2つのものが該当することが分かる。

| | | |
|-------|--------------|----------------|
| [F a] | (いま) そこにいる人は | (あす) ここにいます。 |
| [G a] | (あす) そこにいる人は | (あさって) ここにいます。 |

問題 2

A13-26> そこで本を読んでいた人に話します。

修飾属性は進行中の出来事である。主属性は動作性の出来事である。

- ① 時相的に何とおりの解釈の可能性があるだろうか。
- ② 事態の状況を保ちながら「いた」を「いる」に換えられるだろうか。

* * * * *

- ① 要領は問題 1 と同様である。次の 5 とおりのものが該当する。

[E a] (きのう)そこで本を読んでいた人に (あす)話します。

[E b] そこで本を読んでいた人に(中1日おいて、あす)話します。

[F b] (いま)そこで本を読んでいた人に (あす)話します。

[G b] (あす)そこで本を読んでいた人に (あさって)話します。

[H b'] (あす)そこで本を読んでいた人に 話します。

・[H b']は[22' / !] (A4章)の時相関係である。

- ② このうち最後の 3 つは、相対テンスを絶対テンスにすれば「いた」を「いる」に換えることができる。

[F a] (いま)そこで本を読んでいる人に (あす)話します。

[G a] (あす)そこで本を読んでいる人に (あさって)話します。

[H a] (あす)そこで本を読んでいる人に 話します。

「テンス的分化」って何? → p. 175

「前を走る車」が過去で使えるのはなぜ? → p. 178

「彼女が食べるチーズをテーブルに置きます」3 解釈ある? → p. 180

形容詞も出来事としてとらえる場合がある? → p. 182

形容詞従文・主文の時間的位置関係を体系表にできる? → p. 189

テンス的分化がない場合の形容詞従文は質でとらえる? → p. 195

「激しかった雨が降った」はなぜおかしい? → p. 196

形容詞の誤用はどういう条件で生じる? → p. 199

A14章

従文内容を質的に把握する

A14.1 動詞を質的に把握する場合

A12章において、修飾属性を「出来事的にとらえる場合」と「質的にとらえる場合」とに分けることを述べた。続くA13章において、「動詞属性を出来事的にとらえる場合」について論じた。このA14章では「動詞属性を質的なものとしてとらえる場合」に言及する。

次の例文はA12章で設定したものである。

A14-1> 花火を作る人が話す。 (=A12-6), 構造図は図A12-2)

この例文の動詞「作る」をA13章では出来事としてとらえたわけであるが、本章では「実体の持つ特質」としてとらえることになる。つまり、「花火を作る人」というのは、実体「人」が特質として「花火を作る」属性をもつのである、意味は「花火師」のようなものとなる。

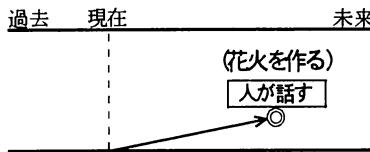
修飾属性「花火を作る」は「人」の特質であって出来事ではないので、時空モデル上に出来事と同じような四角形で表すことはできない。そこで、修飾属性は()の中に入れて表示することにする(図A14-1 ~ -3)。

また、出来事としてとらえるときにはあったのであるが、ここでは修飾属性・主属性の一方が未来にあり、他方が過去にあるといったテンス的分化^{*1}はない。修飾属性・主属性はセットになっており、過去か現在か未来かのいずれかにおいて両者は結びついたままでしか実現しない。図は3種類しかない。

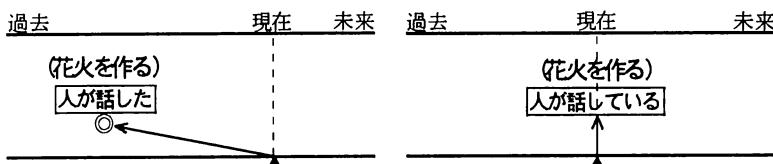
*1 テンス的分化というのは、修飾属性・主属性が過去と未来に分かれる場合ばかりでなく、両者とも過去や未来にありながら時間的に先後関係のある場合をも含んでいる。

A V 部 複文(3) 従文のテンスとアスペクト

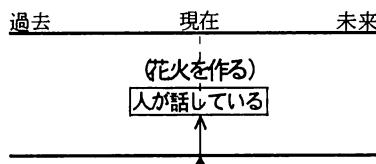
修飾属性は出来事ではないので、テンス・アスペクトに関係がない。実体(名詞)の修飾は常にル形によって行われる。未来の場合(図A14-1)も、過去の場合(図A14-2)、現在の場合(図A14-3)も、すべて「作る tukur-u」でよい。



図A14-1 花火を作る人が話す



図A14-2 花火を作る人が話した



図A14-3 花火を作る人が話している

A14.2 図記号および記号

従文内容を実体の質として把握する場合の図記号は、上図を簡略化して、次のようなものにする。



図A14-4 過去



図A14-5 現在



図A14-6 未来

そして、次のように記号化する。

過去 1)2○

現在 1)②

未来 1)○2

この記号で、1) というのは、A13章では **1** として表示されていた修飾属性が、出来事としてではなく質としてとらえられていることを表している。また、○が現在点を表し、その前(左)が過去、その中が現在、その後(右)が未来を表すことは、前章で行った記号化のとおりである。

A14章 従文内容を質的に把握する

それで例えば、

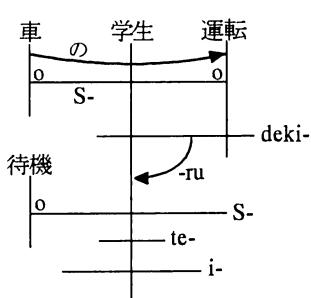
A14-2> 英語を話す人が3人来る。

という文の表す内容は 1)○2 という記号で表すことができる。

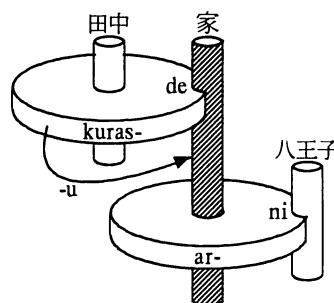
A14-3> 車の運転ができる学生が待機している。(図A14-7)
は 1)② で表すことができ、

A14-4> 田中さんが暮らす家は八王子にある。(図A14-8)
も 1)② で表すことができる。「家」は「田中さんが暮らす」という特質を客体として持っている。(「田中さんが家で暮らす」)

A14-5> 当時、われわれがする仕事は彼を通して来た。
これは、1)2○ で表すことになる。「仕事」は「われわれがする」という特質を客体として持っている。(「仕事をわれわれがする」)



修飾構造
主構造



図A14-7 車の運転ができる学生が待機している

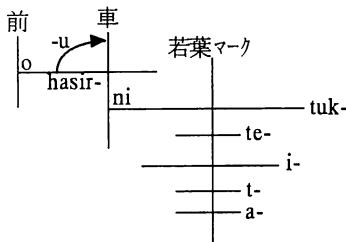
図A14-8 田中さんが暮らす家は八王子にある

A14.3 質が進行中のアスペクトのように感じられる場合がある

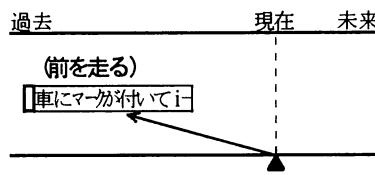
ある実体の質・特性は、恒常にであるにせよ、一時にであるにせよ、その実体の存在と結びついている。その質・特性は、いわば、存在と同時的なものとして認知されるので、その存在が出来事の進行中の局面にあると感じられる場合には、質を表すはずの形が、あたかも進行中のアスペクトを表しているかのように感じられることになる。

それで、

A14-6> 前を走る車に若葉マークが付いていた。(図A14-9, 図A14-10)
 という文では、(過去というテンスにおいての)「走る」という形態が示すように、「前を走る」は「車」の質としてとらえられているのであるが、これは容易にA14-7>, A14-8> のように進行中の出来事として言い換えられる。



図A14-9 前を走る車に若葉マークが付いていた 図A14-10

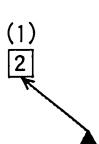


図A14-9 前を走る車に若葉マークが付いていた 図A14-10

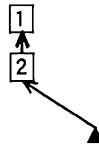
A14-7> 前を走っている車に若葉マークが付いていた。(図A14-12)

A14-8> 前を走っていた車に若葉マークが付いていた。(図A14-13)

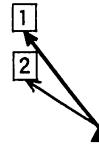
図記号(図A14-11～図A14-13)で表せば、その三者間の関係がよくわかる。
 (「若葉マークが付いていた」そのものは結果状態存続のアスペクトにある。
 図A14-10)



図A14-11 走る車



図A14-12 走っている車



図A14-13 走っていた車

質を表す形(ル形)が機能として進行中のアスペクトを表しているのではなく、たまたま修飾を受けている実体(名詞)の存在が進行中という局面にあるのであり、このとき「質」が「進行中」の質のように感じられるのである。

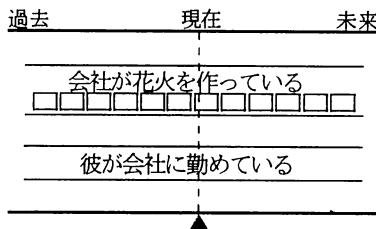
A14.4 質の中身は繰り返しあることもある

A14-9> 彼は花火を作る会社に勤めている。

この文は図記号で示せば 図A14-14 のようになる。記号では「①②」となる。この文での「花火を作る」という「会社」の特質は、その「花火を作る」という出来事が日々繰り返されていることを意味しているので、この関係を時空モデルで示せば図A14-15 のようになる。



図A14-14



図A14-15

それで、「作る」を質としてではなく出来事としてみれば、次のように、出来事の繰り返しを表すテイル形「作っている」に言い換えられる。

A14-10> 彼は花火を作っている会社に勤めている。

この場合も、質を表す形(ル形)が機能として繰り返しのアスペクトを表しているのではなく、たまたま修飾を受けている実体(名詞・会社)の存在が行為の繰り返しのアスペクトにおいて存在しているのであり、このとき「質」が「繰り返し」の質のように感じられるのである。とはいえ、長期にわたり繰り返されていることは、すでにその実体の質である、と言える場合もあるであろう。そう考えれば、「質」は繰り返しをその内容としている場合もある、と言えることになる。

このような、質が繰り返しを含意するような場合の他の例として、次のような文を挙げることができる。

A14-11> 輸入品の文房具を売る店が近所にある。

A14-12> 彼女は当時、中国語を教える塾に通っていた。

A14.5 ル形の3とおりの解釈……「彼女が食べるチーズ」の解釈

ル形には質を表す機能のほかに、絶対テンスの未来と相対テンスの以後を表す機能がある。それで、3とおりの解釈ができる場合があることになる。

A14-13> 彼女が食べるチーズをテーブルに置きます。

という文の中の「食べる」は、次の3とおりの解釈が可能である。

- ① 例えばチーズという種類のチーズは「彼女がいつも食べる」という特性を持っている。この特性を表すものとしての、テンス・アスペクトに関わらない「食べる」。
- ② 発話時より(1時間)後という未来に彼女が行う行為としての「食べる」。
- ③ 置いた時点より(1時間)後に彼女が行う行為としての「食べる」。

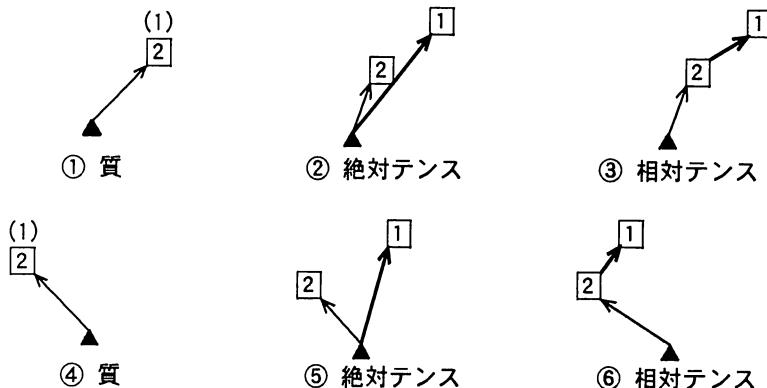
図記号で示せば、下図①～③のようになる。

この3とおりの解釈があることは過去の場合でも同じである。

A14-14> 彼女が食べるチーズをテーブルに置きました。

- ④ ①と同じ。
- ⑤ ②と同じ。
- ⑥ ③と同じ。

図記号では下図④～⑥のとおりである。⑥は[1]の位置がより右の現在・未来にある可能性もある。(⑥の場合、チーズはもう食べてしまっている。)



A15章

従文が形容詞文である場合

—「激しかった雨が降った」はなぜおかしいのか—

A15.1 形容詞は質的に把握するだけのものと考えてよいか

形容詞は実体(名詞)の「質」を表すのが本務の属性である。その意味では動詞の「質的把握」の場合と同じ扱いができるはずである。動詞の質的把握の場合は、出来事ではないのでテンス・アスペクトに関係がない。

① 常にル形で実体(名詞)を修飾する。

A12-6> 花火を作る人が話す。(構造図は図A12-2)

A14-6> 前を走る車に若葉マークが付いていた。(図A14-9, -10)

② 修飾属性・主属性のテンスの分化もない。(A14.1)

しかし、形容詞はこの動詞の質的把握の場合と同様に考えることはできない。①②に関して同じことは言えないである。

①' 実体(名詞)を修飾するのは、イ形ばかりでなくタ形も可能である。

A15-1> おいしきうどんを食べた。

A15-2> あのころのおいしかったうどんが懐かしい。

A15-3> 食べた後で、いちばんおいしかったものに印をつけてください。

②' 修飾属性・主属性のテンス分化がある。

A15-4> あの赤い(質的把握)車が先に出る(未来)。(テンス非分化)

A15-5> いまは小さい(現在)木がやがて大きくなる(未来)。(テンス分化)

A15-6> さっき熱かった(過去)お湯がいまはぬるい(現在)。(テンス分化)

つまりこれは、形容詞は質的に把握するだけのものではなく、出来事として把握しなければならない場合もあるということを物語っている。

A15.2 出来事と質

形容詞の場合も出来事と質の2つの場合に分けて把握する必要があるようである。動詞の場合は、出来事として把握する場合(A13章)と、質として把握する場合(A14章)を、章を分けて扱ったが、形容詞の場合はこのA15章でまとめて扱うことにする。

動詞の場合は、次のようになっていた。

動詞のとらえ方

表A15-1

| 把握 | | 形式 | 矢印 |
|---------|-------|--------|------|
| 出来事 | 過去／以前 | (ティ)タ形 | 左上 ↗ |
| | 現在／同時 | (ティ)ル形 | 上 ↑ |
| | 未来／以後 | (ティ)ル形 | 右上 ↘ |
| 質 (非時相) | | ル形 | なし |

では、形容詞の場合はどうなるのであろうか。形容詞の場合は、動詞にならえば、次のとおりになるはずである。

形容詞のとらえ方

表A15-2

| 把握 | | 形式 | 矢印 |
|---------|-------|----|------|
| 出来事 | 過去／以前 | タ形 | 左上 ↗ |
| | 現在／同時 | イ形 | 上 ↑ |
| | 未来／以後 | イ形 | 右上 ↘ |
| 質 (非時相) | | イ形 | なし |

このことを確認していきたい。

A15.3 形容詞を出来事として把握する

形容詞を出来事として把握することはできるのか、どう図示するのか、について考えてみる。

形容詞は一般的の動詞のような出来事性は少ない。出来事性の程度は状態性動詞の「ある・いる」に似ており、ティル形を持たない等、時相的に制限が

強い。

1) 形容詞も出来事を表す

動詞の「いる」を用いた次の文

A15-7> 私はあす3時から5時までここにいる。

では、未来の状態性の出来事が表されている。これが過去になれば、

A15-8> 私はきのう3時から5時までここにいた。

となる。

形容詞の場合も同様のことが言え、

A15-9> 私はあす3時から5時まで忙しい。

では、未来の状態性の出来事が表され、

A15-10> 私はきのう3時から5時まで忙しかった。

では、過去の状態性の出来事が表されている。

形容詞も、状態性という制約はあるが、出来事として把握できる場合があると言える。

2) 形容詞も相対テンスをとる

さらに、動詞「いる」の連体修飾では、相対テンスの現象がある。

A15-11> あすここにいた人があさって休む。

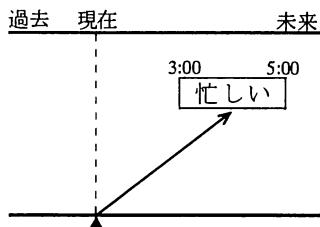
この例では、動詞「いる」の未来における相対テンス<以前>の形式「いた」が現れているが、形容詞でも、次の例のように、まったく同様の現象がある。

A15-12> あす忙しかった人があさって休む。

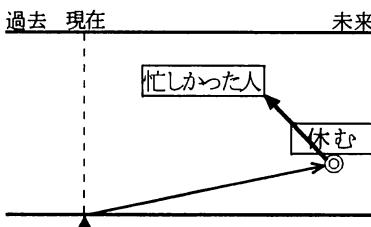
形容詞がもし質だけを表すものであるのであれば、テンス・アスペクトには関わらないはずで、このような相対テンスの振る舞いは起こらないはずである。このような時相に関わる現象があるということは、やはり、形容詞には出来事を表す場合もあると考えるのが妥当であることを示している。(このとき、後述するように、形容詞タ形「忙しかった」は ar- を伴って形容基「isogashi.k-θu=ar-」を形成し、擬似動詞になっている。)

3) 出来事を表す形容詞の図示

では、このような出来事を表すと考えられる場合の形容詞はどのように図示すればよいのだろうか。これもやはり、動詞の場合にならい、図A15-1、図A15-2 のように時空モデルで描くことになる。

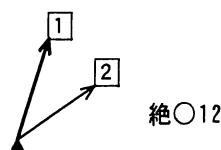


図A15-1 あす忙しい

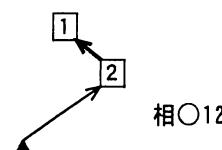


図A15-2 あす忙しかった人があさって休む

また、図記号・記号でも動詞の場合と同様に表すことができる。

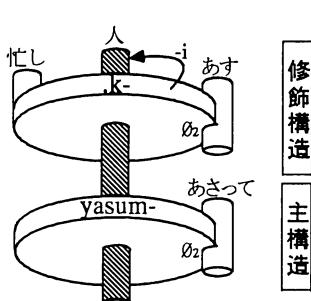


図A15-3 あす忙しい人があさって休む

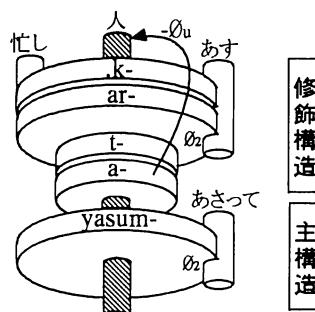


図A15-4 あす忙しかった人があさって休む

構造モデルでは図A15-5、図A15-6 のようになる。



図A15-5 あす忙しい人があさって休む

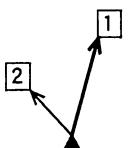


図A15-6 あす忙しかった人があさって休む

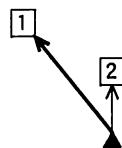
形容詞 *isogasi.k-* はタ形を作るためには 形容基(『文法』8.5, 10.6) *isogasi.k-θu=ar-* にならなければならない。この基の中には動詞 *ar-* が含まれており、形容詞はここでは擬似動詞になっている。

ここで、出来事として扱う場合の例をさらにいくつか挙げておきたい。

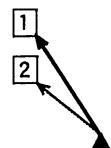
- Ⓐ これから激しい雨は午前中関西で降っていた。(図A15-7)
- Ⓑ けさ関東で激しかった雨が今は東北で降っている。(図A15-8)
- Ⓒ 温泉のように温かかったプールで泳いだ。(図A15-9)
- Ⓓ 走るのがいちばん速かった人を選手にする。(図A15-10)



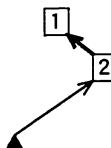
図A15-7 Ⓩ



図A15-8 ⓷



図A15-9 Ⓢ



図A15-10 Ⓣ

Ⓐでは未来に「雨が激しい」という出来事が発生する。Ⓑでは「雨が激しい」という出来事が、またⒸでは「プールが温かい」という出来事がそれぞれ過去に発生した。Ⓓでは「人が走るのが速い」という出来事が発生する。

以上で形容詞には出来事として把握できる場合のあることが確認でき、時相図示は動詞の場合と同様の方式でよさそうであることが分かった。

A15.4 形容詞を質として把握する

1) 質としての把握では常にイ形

次に、形容詞を質として把握する場合について考える。とはいって、形容詞はもともと実体(名詞)の質を表すためのものなので、ここで改めて確認するまでもないことではある。

A15-13> おいしいどんが食べたい。

ふつう、このような文で「おいしい」と言っているのは、テンス・アスペクトに関係がない。確かに「食べたい」のは現在の話者の気持ちであり、実際に食べることになれば「食べる」のは未来の出来事となる。しかし「おい

しい」は、未来において食べる出来事の実現する際に実現する出来事としての「おいしい」ではふつうなく、「うどん」のもつ特質を表すものとして使用されている。

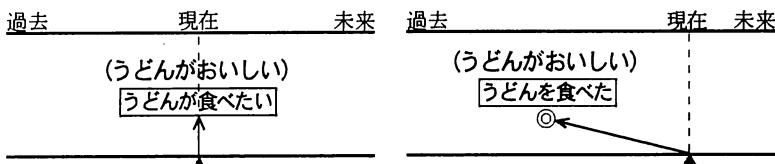
このような「質」を表すものとしての形容詞は常にイ形で現れる。「おいしかった・温かかった・太かったうどん」のようなタ形では出来事になっている。

2) 図示

「質」を表すものとしての形容詞を時空モデルで表すときは、動詞の質的把握の場合にならって、出来事を表す四角形を用いずに、()の中に入れて示すことにする。図A15-11 のとおりである。また、

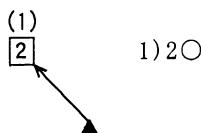
A15-14> きのうおいしきうどんを食べた。

のような、過去の文の場合でも同様であり、図A15-12 のようにする。

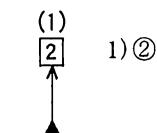


図A15-11 おいしきうどんを食べたい 図A15-12 おいしきうどんを食べた

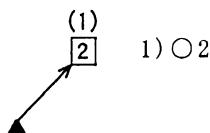
図記号でも同様で、図A15-13～15 のように修飾属性を()内に入れて(1)の形で示す。記号ではやはり 1) のようにする。



図A15-13
おいしいうどんを
食べた



図A15-14
おいしいうどんを
食べている



図A15-15
おいしいうどんを
食べる

A15.5 出来事か質か

形容詞が質として扱われる場合はイ形で現れる。このイ形は、出来事として扱われる場合の形容詞と区別がつく場合と、つかない場合とがある。

このことを考えやすくするために、やはり動詞にならって、形容詞の場合のイ形とタ形の分布表を作成してみた。表A15-3 である。(表の説明については A13.2 の 4)~6) を参照)。

この表から、出来事として扱われる場合の形容詞(修飾属性)が

- ① 過去(絶対テンス) (A, B, C, E) a / (A, B) e / Ac あるいは,
- ② 以前(相対テンス) (B, C, E, F, G) b

にあるときは、タ形という、質のイ形とは異なる形態で現れるので、質ではないことがわかり、区別がつく。しかし、形容詞が

- ③ 現在・未来(絶対テンス) (D, F, G, H) a / (C, D, E, F, G, H) e / (D, H) c あるいは,

④ 同時・以後(相対テンス) (A, D, H) b / (A, B, C, D, E, F, G, H) f / (A, D, H) d にあるときは、質を表すのと同じイ形で現れるので、質なのか、現在・未来／同時・以後なのか、区別がつかない。このことについて検討する。

1) 出来事か質かが区別できる場合

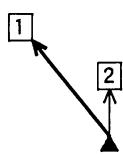
- ① 過去(絶対テンス)の場合 (A, B, C, E) a / (A, B) e / Ac

A15-15> あのころのおいしかったうどんが懐かしい。(図A15-16)

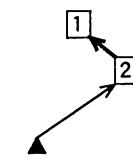
- ② 以前(相対テンス)の場合 (B, C, E, F, G) b

A15-16> (これからこの3杯のうどんの味見をして)

いちばんおいしかったうどんに○印を付けます。(図A15-17)



図A15-16 (Ca)



図A15-17 (Gb)

①②の場合はタ形(おいしかった)で現れており、「うどん」の「おいしい」ことは質ではなく、出来事として扱われていることが明らかである。もし質として扱われるのであれば、次のようにイ形になるからである。

A15-17> あのころのおいしいうどんが懐かしい。(図A15-18)

A15-18> いちばんおいしいうどんに○印を付けます。(図A15-19)



図A15-18



図A15-19

2) 出来事か質かが区別できない場合

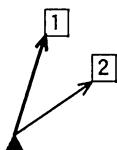
③ 現在・未来(絶対テンス)の場合 (D, F, G, H)a / (C, D, E, F, G, H)e / (D, H)c

まず、未来の場合について見てみる。

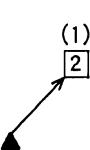
A15-19> (これからこの3杯のうどんの味見をして)

いちばんおいしいうどんに○印を付けます。

このとき「おいしい」が「うどんがおいしい」出来事として扱われているのであれば、図記号は図A15-20のようになり、うどんの質として扱われているのであれば、図A15-21のようになる。どちらも「おいしい」であって、区別がつかない。



図A15-20 (Ga)



図A15-21



図A15-22 (Dc, Dd)



図A15-23

次に現在の場合である。

A15-20> いま、おいしいうどんを食べている。

この例で、「おいしい」が「うどんがおいしい」出来事として扱われているのであれば、図記号は図A15-22のようになる。うどんの質として扱われてい

表A15-3

| | | A | B | C | D | E | F | G | H |
|----------------------------|-------------------|---|-------|-----|----|-------|-----|----|-----|
| 1 が 先 に 生 起 | 絶 対 テン ス | a | | | | | | | |
| | 相 対 テン ス | b | | | | | | | |
| 同時 c d | | | | | | | | | |
| 2 が 先 に 生 起 | 絶 対 テン ス | c | (12)○ | 12○ | 1② | (12)○ | 1○2 | ①2 | ○12 |
| | 相 対 テン ス | d | (3)○ | 21○ | 2① | (3)○ | 2○1 | ②1 | ○21 |
| 2 が 先 に 生 起 | 絶 対 テン ス | e | | | | | | | |
| | 相 対 テン ス | f | | | | | | | |

A V 部 複文(3) 従文のテンスとアスペクト

形容詞(質)従文内のイ形

表A15-4

| 修飾属性 | 主属性 | 文 例 | No. |
|-------|-----|---------------------|-----|
| 質(イ形) | 過去 | 激しい雨が <u>降った。</u> | 質1 |
| | 現在 | 激しい雨が <u>降っている。</u> | 質2 |
| | 未来 | 激しい雨が <u>降る。</u> | 質3 |

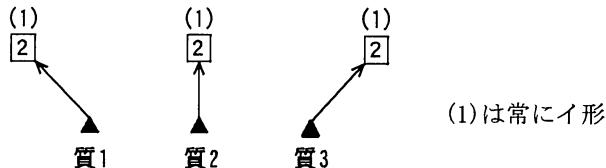
形容詞(出来事)従文内のイ形とタ形

表A15-5

| 修飾属性 | 主属性 | 文 例 | No. | 記号 |
|------|------|-----|-------------------------------|-------|
| 絶 | 過去 タ | 過去 | おととい <u>高かった円がきのう安くなった。</u> | 過1 Ba |
| | 現在 イ | | いまは <u>激しい雨もさつきは小降りだった。</u> | 過2 Ce |
| | 未来 イ | | あす <u>忙しい人はきのう休んだ。</u> | 過3 Ee |
| | 以前 タ | | (聞いて) <u>おもしろかった話を覚えた。</u> | 過4 Bb |
| | 同時 イ | | その晩 <u>美しい花火が楽しめた。</u> | 過5 Ad |
| | 以後 イ | | 翌週は <u>赤い花も当日はまだつぼみだった。</u> | 過6 Bf |
| 絶 | 過去 タ | 現在 | きのう <u>高かった円が今日は安い。</u> | 現1 Ca |
| | 現在 イ | | <u>激しい雨が降っている。</u> | 現2 De |
| | 未来 イ | | あす <u>忙しい人が今日休んでいる。</u> | 現3 Fe |
| | 以前 タ | | (聞いて) <u>おもしろかった話を今覚えている。</u> | 現4 Cb |
| | 同時 イ | | 今晚 <u>美しい花火を楽しんでいる。</u> | 現5 Dd |
| | 以後 イ | | 翌週は <u>赤い花も今はまだつぼみだ。</u> | 現6 Ff |
| 絶 | 過去 タ | 未来 | 今週 <u>安かった円も来週は高くなる。</u> | 未1 Ea |
| | 現在 イ | | いま <u>激しい雨もそのうちやむ。</u> | 未2 Fa |
| | 未来 イ | | あす <u>忙しい人があさって休む。</u> | 未3 Ga |
| | 以前 タ | | (聞いて) <u>おもしろかった話を覚える。</u> | 未4 Gb |
| | 同時 イ | | 今晚 <u>美しい花火が楽しめる。</u> | 未5 Hd |
| | 以後 イ | | 翌週は <u>赤い花も当日はまだつぼみだ。</u> | 未6 Gf |

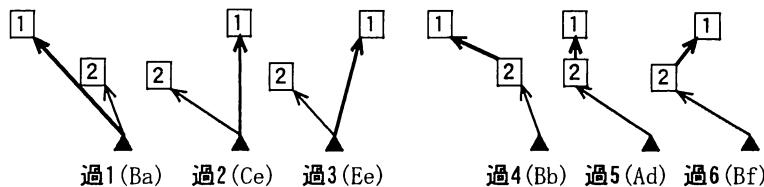
表A15-6

左ページの表A15-4 と 表A15-5 の内容を時相図記号で表す

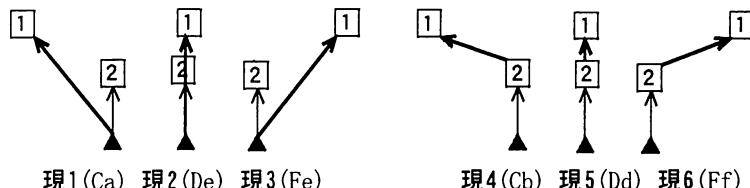
形容詞(質)従文内のイ形 (表A15-4に対応)形容詞(出来事)従文内のイ形とタ形 (表A15-5に対応)

- ▲から出ている矢印(絶対T) ↙(過去・タ) ↑(現在・イ) ↗(未来・イ)
 □から出ている矢印(相対T) ↖(以前・タ) ↑(同時・イ) ↘(以後・イ)

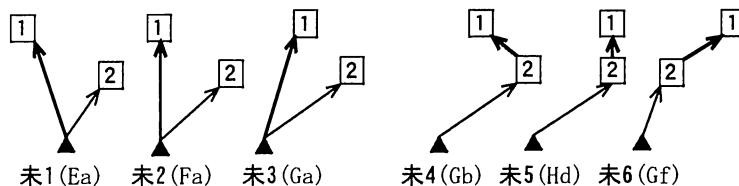
主属性が過去



主属性が現在



主属性が未来



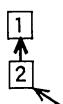
るのであれば、図A15-23のようになる。やはり、どちらも「おいしい」であって、区別がつかない。

④ 同時・以後(相対テンス)の場合

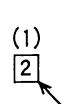
(A, D, H)b / (A, B, C, D, E, F, G, H)f / (A, D, H)d

A15-21> あのころは毎日おいしいうどんを食べた。

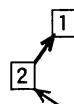
これは同時(相対テンス)の場合の例である。「食べた」出来事は過去の繰り返された出来事である。「おいしい」が「うどんがおいしい」出来事として扱われているのであるから、図記号は図A15-24のようになる。うどんの質として扱われているのであれば、図A15-25のようになる。やはり、どちらも「おいしい」であって、区別がつかない。



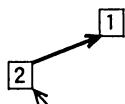
図A15-24(Ad)



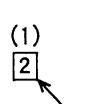
図A15-25



図A15-26(Bf)



図A15-27(Ef)



図A15-28

次に、以後(相対テンス)の場合である。

A15-22> (煮込むと)おいしいうどんを買った。

うどんを買ったのは過去である。出来事として「うどんがおいしい」が生起するのは、買って家へ持ってきて調理した(煮込んだ)後、食べたときである。買った行為より後である。それは過去の場合も、現在の場合も、未来の場合もありうる。それで、出来事としての図記号は図A15-26(過去)、図A15-27(未来)のようになる(現在は省略)。一方、うどんの質としてとらえるのであれば図A15-28(=図A15-25)のようになる。時相形式は異なっていても形態上はいずれも「おいしい」であって、やはり区別がつかない。

以上により、出来事であるか、質であるかが区別できる場合と区別できない場合があることを確認した。いずれの場合も表の領域として示すことができる。

A15.6 形容詞のイ形とタ形の使い分け

A15.2 では動詞にならって 表A15-2 を作成した。以上において表の内容の妥当性が確認できたと思われる所以、改めて次のようにまとめたい。

- ・質としてとらえる場合は常にイ形で用い、表A15-4のようになる。
- ・出来事としてとらえる場合は表A15-5のようになる。

この両表を図記号で表示したものが表A15-6である。

次に形容詞のイ形とタ形の使い分けについて考えてみる。

1) 修飾属性・主属性のテンスが分化する場合……使い分けの問題なし

形容詞が出来事を表す場合、修飾属性・主属性のテンスの分化しているものは問題がない。分化しているということは出来事で扱っていることの表れであって、質として扱っていないことは確かである。その場合は、出来事としての扱いか質としての扱いかで、迷うことはない。

出来事として扱うのであるから、それぞれに相対テンスでの扱いと、絶対テンスでの扱いがある。

A15-23> 翌週は赤い花も当日はまだつぼみだった。(過6 相 Bf)

A15-24> 翌週は赤かった花も当日はまだつぼみだった。(過1 絶 Be)

上の場合は、イ形とタ形で相対テンス、絶対テンスの区別ができる。しかし、

A15-25> (聞いて)おもしろかった話を覚えた。(過4 相 Bb)

A15-26> (聞いて)おもしろかった話を覚えた。(過1 絶 Ba)

の例のような場合は、両者ともタ形で表されるので絶対・相対テンスの区別はできない。

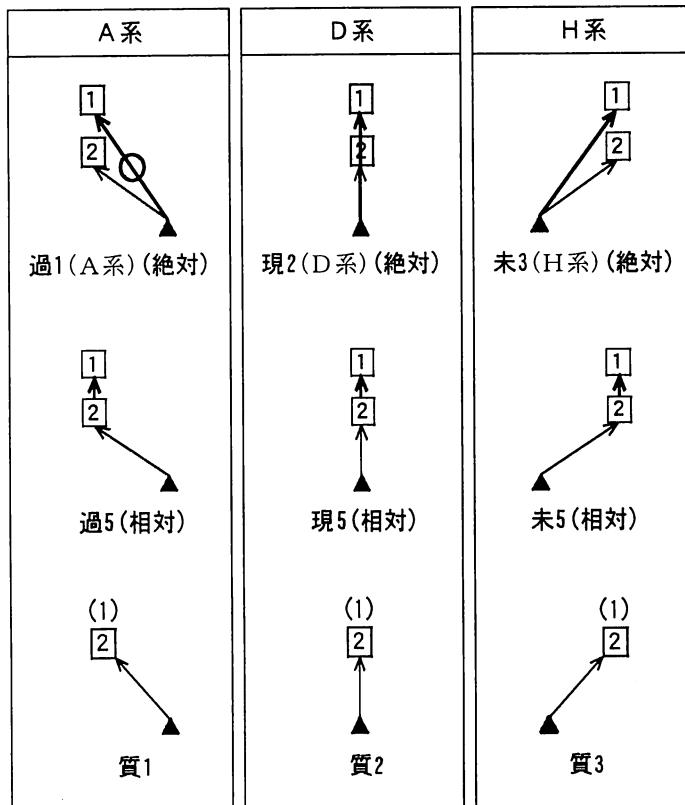
形のうえでテンスの区別ができるものとできないものとがあるが、それはともかくとして、テンスが分化している場合は修飾属性は出来事として扱われているわけで、その場合は質であるか出来事であるかで悩むという問題は生じない。出来事として扱うのであるからイ形とタ形の使い分けは表A15-3の該当部分に従えばよいのである。

2) 修飾属性・主属性のテンスが分化しない場合…… A 系に問題あり

テンスの分化していない場合はどうであろうか。表A15-3でいえば、A系、D系、H系の場合である。表A15-5でいえば、絶対テンスで過1(A系)、現2(D系)、未3(H系)の場合、及び相対テンスで過5、現5、未5の場合である。これらの場合にはテンスが分化しない(図A15-29～-31)。

これらの場合は、修飾属性と主属性が同時に生起している。

テンスが分化していない場合には、下図のような形での3とおり(絶対テンス、相対テンス、質)の可能性があるわけである(A14.5)。



図A15-29

図A15-30

図A15-31

A15章 従文が形容詞文である場合

未来(表A15-3 の中のH系, 図A15-31)の場合でみれば, 出来事としてとらえることができ, 2とおりの可能性がある。

①絶対テンス

A15-27> 今晚美しい花火が楽しめる。(未3 絶 Hc)

②相対テンス

A15-28> 今晚美しい花火が楽しめる。(未5 相 Hd)

③これに加えて, 質としてとらえるもう1つの可能性がある。

A15-29> 今晚美しい花火が楽しめる。(質3)

未来の場合はすべてイ形になってしまうので, 使い分けの必要はない。絶対テンスなのか, 相対テンスなのか, 質なのかを考える必要がない。

このことは現在(D系, 図A15-30)の場合も同じで, これも問題がない。

A15-30> 今晚美しい花火を楽しんでいる。(現2 絶 Dc)

A15-31> 今晚美しい花火を楽しんでいる。(現5 相 Dd)

A15-32> 今晚美しい花火を楽しんでいる。(質2)

問題なのは, 過去(A系, 図A15-29)の場合である。

A15-33> ?その晩美しかった花火が楽しめた。(過1 絶 Ac)

A15-34> その晩美しい花火が楽しめた。(過5 相 Ad)

A15-35> その晩美しい花火が楽しめた。(質1)

過去(A系)の場合は絶対テンスでタ形が現れるのである(図A15-29, 過1絶対〇印)。このタ形には「?」がつくことになる。日本語母語話者の感覚では, これは十分自然な文としては感じられない。これはつまり, 形容詞である修飾属性を出来事として扱い, それを絶対テンスで表現することが適当ではないことを示している。

形容詞は元來質を表すものなのであるから, テンスが分化していない場合は質としてとらえるのが原則なのかもしれない。(だとすれば, 過去A系だけでなく, 現在D系と未来H系のテンスの分化していない場合のイ形も, 質のイ形と見分けがつかないが, 実は絶対テンスではなく相対テンスと質に, さらには「質」のみに制限されている可能性がある。)

3) テンスが分化しない場合は質でしかとらえられない?

修飾属性と主属性のテンスの分化がない場合、主属性が過去にあるときは、修飾属性に絶対テンス(タ)を適用することはできないものようである。これはつまり、修飾属性を出来事とみなしてはいけない、ということのようである。

確かに、例えば

A15-36> 激しい雨が降った。(図A15-33)

において、「降った」ときには「激しい」雨だったのだからテンスの分化はない。このとき、

A15-37> *激しかった雨が降った。(出来事・絶対テンス)(図A15-34)

のように、「激しい」を「激しかった」にすることはできない。「雨が激しい」を出来事とみなしてはいけないというわけのようである。

形容詞は元来「質」を表すものであるから、「質」としてとらえることは問題がなく、「出来事」としてとらえる場合に問題が生じる。

では、

A15-38> その晩、去年のと同じように美しかった花火が楽しめた。

のような文で、タ形の許容度が増すのはなぜだろうか。この場合には絶対テンスが適用され、したがって、出来事として扱われている。

テンスが分化しない場合でも、形容詞が出来事としてとらえられる場合があるようである。そのときはどんな条件下にあるのだろうか。質と出来事はどう区別されているのだろうか。

4) 修飾属性の形容詞が出来事である場合の条件は?……時の中での特定化

「質」は実体に属し、時空(いつ・どこで)からは一応独立している。一方、「出来事」は実体の参与がなければ生起しないものの、どちらかといえば時空に属しており、特に時の展開の中(どのような経過のどの時点で)に位置をとる。だから、形容詞を「出来事」としてとらえるためには形容詞の表す内容を時間の中に張りつければよいのではないだろうか。

上の例文には？が付いている。

A15-33> ?その晩美しかった花火が楽しめた。(過1 絶 Ac)

もし「その晩」がなければ、？も付かないで非文になるであろう。

A15-39> *美しかった花火が楽しめた。

その場合、出来事としてはとらえられず、「質」として扱われているのであるから「美しい花火」にしなければならない。

しかし、上例(A15-33)には時を示す「その晩」があるにもかかわらず、？が付いている。これは、「その晩」で一応「時」の中には位置づけられてはいるものの、まだ出来事として特定化されていないので、出来事として扱うには不十分であるためである。これは例えば、先の例のように、

A15-38> その晩、去年のと同じように美しかった花火が楽しめた。

というような形で「花火が美しい」を(「去年のと同じように」によって)特定化すれば、出来事として扱えるようになる。

A15-40> *激しかった雨が降った。(図A15-34)

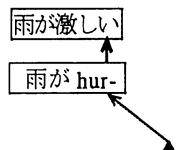
も、

A15-41> 昨年中で最も激しかった雨が降った。(図A15-35)

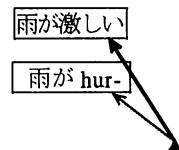
のように、特定化されれば、「雨が激しい」を出来事として扱うことができ、絶対テンス過去<タ形>で扱えるようになり、自然になる。



図A15-32 激しい雨が降った



図A15-33



図A15-34* 激しかった雨が降った



図A15-35 昨年中で最も激しかった雨が降った

形容詞を「出来事」としてとらえるためには形容詞の表す内容を類似の出来事と相対化することによって特定化して「時」の中に張りつければよいのではないだろうか。

A15-42> おいしいカレーを食べた。

では、「おいしい」は出来事ではなく、形容詞本来の質のままであり、

A15-43> *おいしかったカレーを食べた。

とは言いにくい。

しかし、例えば、

A15-44> A店で食べたのよりおいしかったカレーを食べた。

であれば、特定化(相対化)がなされ、時間の中に張りつけられ、出来事となっている。「カレーがA店で食べたのよりおいしい」という「出来事」が生起したのである。

A15-45> とうもろこしを打ち倒すほど激しかった雨が降った。

でも同様である。「とうもろこしを打ち倒すほど激しい」という「出来事」が特定の時間に生起したことになる。「激しかった雨が降った」という形式も、このような形であれば可能となる。

5) 状況による特定化もある

A15-46> 若い田中さんはそこまで気が回らなかった。

の「若い」は質であるが、

A15-47> 若かった田中さんはそこまで気が回らなかった。

の「若かった」は出来事の一種である。ここには「若い」を特定化するような修飾語句はないが、それに代わるものとしての状況がある。この文から知られる状況は、例えば、田中さんはいまは経験を積んで、何事にもよく気が付くようになっている、というような状況である。そのような状況のもとで当時の彼の様子が現在との対比において、特定化(相対化)され、時間の中に張りつけられている。「田中さんが若い」という出来事、かなり長い時間がかかるが、その出来事が生起していたことを状況が物語っているのである。

6) 出来事であるための条件

形容詞の場合、テンスの分化しないときは出来事であることを十分に主張しないと、形容詞本来の機能の「質」の表示とみなされてしまう。単に「激しい」だけでは出来事とは見なされず、絶対テンスの適用を受けること（「激しかった」になること）はできない。出来事として見なされるためには特定化(相対化)されて一定の時間の中に張りつけられる必要がある。

7) 誤用

形容詞のイ形とタ形の使い分けで問題が起こるのは、過去(A系)のテンスの分化しない場合に絶対テンスを用いるときである。出来事であることを主張しないと質とみなされて、絶対テンスの適用を受けることができないのである。(テンスの分化しない現在(D系)・未来(H系)についても同様のことになっているのかもしれないが、質と同様イ形で表されるために見分けがつかないので断言はできない。A15.6 2)末参照。)

それで、誤用という実際的観点からとらえるとき、日本語学習者が誤用を起こすのは、

過去の、テンスの分化がないとき、形容詞の表す内容が特定化(相対化)されて時間の中に張りつけられて出来事としてみなされるようになつてはいないのに絶対テンスを用いてしまう場合である、ということになる。その場合に「*激しかった雨が降った」が産出されるのである。

8) 「激しかった雨がやんだ」は、どう考える？

「*激しかった雨が降った」は不自然だが、

A15-48> 激しかった雨がやんだ。

は自然である。これはどう考えればよいのだろう。

「激しかった雨がやんだ」が自然な文であるということは、修飾属性「激しい」にタが適用されていることから、

A V 部 複文(3) 従文のテンスとアスペクト

- ①「雨が激しい」という出来事と「雨がやむ」という出来事がテンス的に分化しているということを意味している。
- ②テンス的に分化していなくとも、「雨が激しい」が修飾等により出来事であることの主張が十分なされていて、出来事として扱われるようになっている。

のいずれか、あるいは両方であることが考えられる。

しかし、②に関しては、上で見たように、修飾等のない「激しかった雨」にそのような出来事であることの主張を見いだすことは無理なので、②は成立しない。となれば、①のテンス分化で考えるのがよい、ということになる。
ここで扱っているのは過去のテンス分化(B a, B b)であるから、「やむ」は「やんだ」の形式においてである。

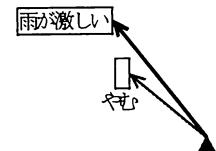
では、「やんだ」というのはどういう状況を指すのだろうか。例えば「3時にやんだ」というときは、3時にはどういう状況になっていたのだろうか。「やんだ」と言えるのは「やんだ」ことが「確認できた」時点においてであろう。ということは、実際に降る出来事が完了した瞬間ではなく、その瞬間の後のもう降らないことが確認できた時点である。つまり実際の降る出来事の完了より若干遅れることになるだろう。3時にはもう降っていないのである。(実際は少々雨が残っていても「やんだ」と言うことはあるが、それは正確には「ほとんどやんだ」という状況においてであり、「やんだ」状況ではない。)(さらにいえば、この場合はそれだけではない。「激しい雨」がやむときは、激しいまま瞬間にやむことはないであろう。「激しい雨」が終わって、なにがしか雨足の衰えた状況が続いてからやむであろう。)

つまり、「雨が激しかった」出来事と「やんだ」出来事の間には確かにテンス分化があるのである。これが結論である。そこで、図A15-36, -37 のような図示となる。前者は絶対テンスでの、後者は相対テンスでの描写である。
ちなみにつけたしておけば、

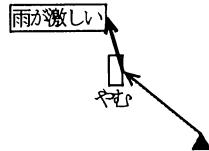
A15-49> 激しかった雨がやみ始めた。

という場合は、絶対テンスで示せば 図A15-38 のようになる。「やむ」はあ

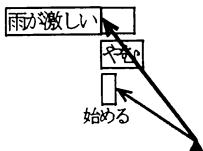
る長さを持ち、「雨が激しい」出来事が終わって雨足に激しさが感じられなくなつたときに開始するのである。やはりテンス分化が認められる。



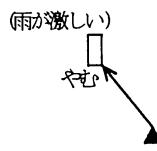
激しかった雨がやんだ
図A15-36 (絶対テンス)



激しかった雨がやんだ
図A15-37 (相対テンス)



図A15-38 激しかった雨がやみ始めた



図A15-39 激しい雨がやんだ

なお、

A15-50> 激しい雨がやんだ。

では、「激しい」は質として(あるいは同時として)とらえられており、これは形容詞本来の使用法であり、特に問題はない(図A15-39)。

9) 節のまとめ

次のようにまとめて、このA15.6「形容詞のイ形とタ形の使い分け」の節を閉じることにしたい。

- ① 形容詞は元来出来事よりは質を表すものとしての属性である。
- ② 修飾属性(1)としての形容詞は、特にテンスが分化していない場合に質として機能しやすい。テンスが分化している場合は出来事として扱われているわけで、絶対テンス・相対テンスの使用が十分可能であり、イ形とタ形の使い分けは原則どおりに行われ、問題は生じない。
- ③ テンスが分化していない場合に絶対テンスを使用する場合は、その修飾属性(1)である形容属性が出来事として扱われているのだというこ

とを十分主張しなければならない。そのためには、形容詞を、修飾により（あるいは状況等により）相対化・特定化し、時間の中に張りつける必要がある。

④ ③は特に修飾属性としての形容属性が過去にあるときに考慮する必要のあることであり、現在・未来にある場合には（絶対テンスもイを使用するので）無視してよい。

◎ なお、「百円である／百円の」「健康である／健康な」のような状態性の構造で、基本的に出来事としてよりは質としてとらえられるものは、形容詞に準じた扱いになる（9）まとめ①～④）。

名詞を修飾する方法には4通りある？ → p. 204

いわゆる連用形も名詞を修飾する？ → p. 205

日本語では実体と属性が格の関係になくとも修飾できる？ → p. 207

「実体修飾」って何？ → p. 207

実体修飾を考えるための用語にはどんなものがある？ → p. 208

「さんまを焼く煙」は○、「さんまを焼くビン」は×？ → p. 209

第1修飾法には6種類くらいの構造類型がある？ → p. 211

「おふろに入るタオル」って言う？ → p. 214

「たばこを買ったおつり」の「買った」のテンスは？ → p. 217

同じ表層形式でも修飾関係構造には複数の可能性がある？ → p. 219

「着る人が少なくなった着物」の構造は？ → p. 224

条件基のトが接続力を持つのは「格」の力？ → p. 226

比較の基準を表すヨリ格はどう定義できる？ → p. 230

「学校がある東側に公園がある」の位置関係は？ → p. 231

「電車の走る音」と「走る電車の音」は同じ？ → p. 234

カラ格、マデ格、ト（共同者）格の名詞は修飾されない？ → p. 237